

2021年度 北海道大学 大学院文学院

北海道大学 大学院文学院

2021

*Graduate School of
Humanities and Human Sciences
Hokkaido University*



北海道大学
大学院文学院

Graduate School of
Humanities and Human Sciences
Hokkaido University

文学院院长挨拶

「文学院」への誘い

北海道大学大学院文学院は、前身の文学研究科の蓄積を着実に継承しつつ、加えて新たな学問領域も担うことを目指した、北の大地における人文科学の研究教育拠点です。従来の4専攻を統合再編し、人文学専攻と人間科学専攻の2専攻体制に変えることで、新たな研究領域を創設するとともに、分野間の垣根を越えた研究教育がしやすくなるように生まれ変わりました。

北大文学院の大きな特徴は、思想・歴史・文学などの人文学に属する分野と、心理学・社会学などの人間科学と呼ばれる領域に含まれる分野が、お互いに結びつきながら研究教育が行われているという点です。専門とする分野の高度な教育を享受しつつ、他の専攻に属する分野の授業を受けることにより、自身の研究をより俯瞰的、客観的にとらえることができます。二つの領域が一つの場で共生することによって、新たな可能性の揺籃たることを目指しているのです。

これからの大学院教育で求められるのは、専門分野に関する深い見識を備えると同時に、専門分野以外にも広がりをもつ創造的な視点を育てていくことです。こういった要請に応えるべく、修士課程では大学院としては異色の必修講義科目を設置し、分野横断的な観点から現代社会における諸問題を考察する姿勢を養えるようなカリキュラムを用意しています。また、文学院は北大の他の組織と連携して、今までにはなかった斬新な教育プログラムや取り組みに積極的に関わっています。文系・理系という古い垣根にこだわらない先進的な教育を展開することによって、多角的な視野をもって専門的研究に取り組む研究者を養成します。

さらに、複雑さを極めるこれからの社会において、大学院で行われる高いレベルの教育を受けた人材が様々な分野で必要となってくることに疑いはありません。アカデミックな分野の研究者だけではなく、民間企業や官公庁、教育分野などで活躍する人材を育成することが、大学院の社会的役割として急務となっていると言えます。このような時代的要請に応えるため、「教養深化プログラム」というまったく新しい学びの場を提供しています。諸課題を解決していく上で不可欠な思考力や、自分のアイデアを他の人にわかりやすく提示し、社会に実現していくスキルや能力を身につける貴重な機会となるはずです。

文学院では、大学院生のみなさんが確実に論文や研究課題を完成させることができるように、きめの細かいカリキュラムが整えられています。美しい環境に囲まれた北大文学院で、汲み尽くすことのできない学問という奥深い世界に浸りながら、自らの人間性と教養を磨き、人間が生み出した豊かな文化を継承していく一員となってみませんか。



北海道大学大学院文学院院长

藤田 健 ふじた たけし

CONTENTS

文学院概要

文学院の特徴・履修モデル	03-04
教養深化プログラム	05-06
支援制度	07-08

専攻・講座・研究室紹介

人文学専攻	09-12
哲学宗教学講座 哲学倫理学研究室	13
哲学宗教学講座 宗教学インド哲学研究室	14
歴史学講座 日本史学研究室	15
歴史学講座 東洋史学研究室	16
歴史学講座 西洋史学研究室	17
歴史学講座 考古学研究室	18
文化多様性論講座 文化人類学研究室	19
文化多様性論講座 芸術学研究室	20
文化多様性論講座 博物館学研究室	21
表現文化論講座 欧米文学研究室	22
表現文化論講座 日本古典文化論研究室	23
表現文化論講座 中国文化論研究室	24
表現文化論講座 映像・現代文化論研究室	25
言語科学講座 言語科学研究室	26
スラブ・ユーラシア学講座 スラブ・ユーラシア学研究室	27
アイヌ・先住民学講座 アイヌ・先住民学研究室	28
在校生が語る「エルムの森の日々」 case 1	29-30
人間科学専攻	31-32
心理学講座 心理学研究室	33
行動科学講座 行動科学研究室	34
社会学講座 社会学研究室	35
地域科学講座 地域科学研究室	36
在校生が語る「エルムの森の日々」 case 2	37-38

TOPICS

研究環境	39
関連組織	40

インフォメーション

学生生活	41
入試から入学まで	42
進路・就職	43-44

キャンパスマップ	45
----------	----

「人文学専攻」と「人間科学専攻」の2専攻体制

文学院は、改組前の組織である文学研究科の思想文化学・歴史地域文化学・言語文学専攻を統合することで人文学の総合的な学びが可能となった「人文学専攻」と、人間システム科学専攻の先端的で豊かな研究環境を継承・発展させた「人間科学専攻」との2専攻からなります。学際的な人文・社会科学諸分野の学修を通して、俯瞰的な視野から人間と社会をめぐる知を身につけることができます。

● 多彩な11講座20研究室からなる2専攻。100名を超える教員が深く柔軟な学びを支えます。

人文学専攻

Division of Humanities

- 多様な分野を網羅しており、人文学を総合的かつ領域横断的に学ぶことができる人文学専攻。大学院生のみなさんの「学びたい」気持ちに柔軟に応えるカリキュラムとなっています。
- 考古学研究室、文化人類学研究室、博物館学研究室、アイヌ・先住民学研究室を新設することにより、社会的な関心に対応した、これまで以上に多彩な学修ができます。
- スラブ・ユーラシア学、アイヌ・先住民学など、北海道の地域的な特性を活かした「ここでしかできない学び」があります。

哲学宗教学講座

- 哲学倫理学研究室
- 宗教学インド哲学研究室

歴史学講座

- 日本史学研究室
- 西洋史学研究室
- 東洋史学研究室
- 考古学研究室*

文化多様性論講座

- 文化人類学研究室*
- 博物館学研究室*
- 芸術学研究室

表現文化論講座

- 欧米文学研究室
- 中国文化論研究室
- 日本古典文化論研究室
- 映像・現代文化論研究室

言語科学講座

- 言語科学研究室

スラブ・ユーラシア学講座

- スラブ・ユーラシア学研究室

アイヌ・先住民学講座

- アイヌ・先住民学研究室*

詳細は p.09

人間科学専攻

Division of Human Sciences

- 人間と社会に関する総合的な学修ができます。
- グローバルCOEなど大型研究プロジェクトの実績を活かした世界レベルの研究に基づく高度で実証的な学びができます。
- 実験、実習、フィールドワーク等、多彩な研究手法が学べます。
- 科学的アプローチに基づく人間科学研究の国際的拠点を活かした学びができます。

心理学講座

- 心理学研究室

行動科学講座

- 行動科学研究室

社会学講座

- 社会学研究室

地域科学講座

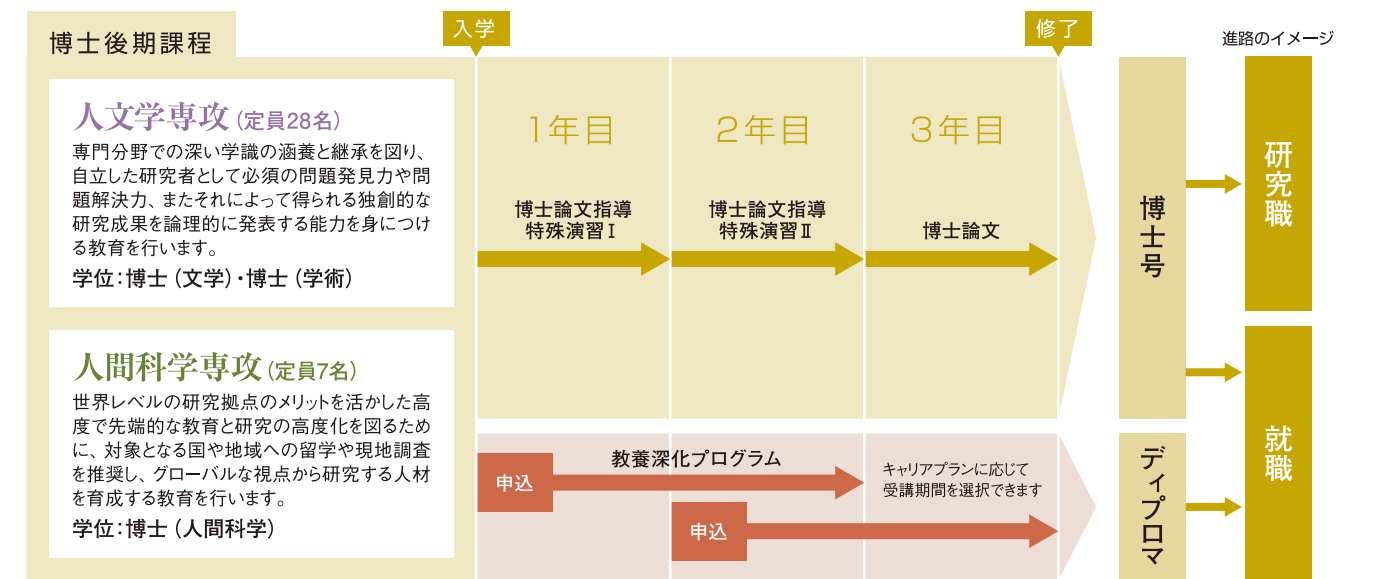
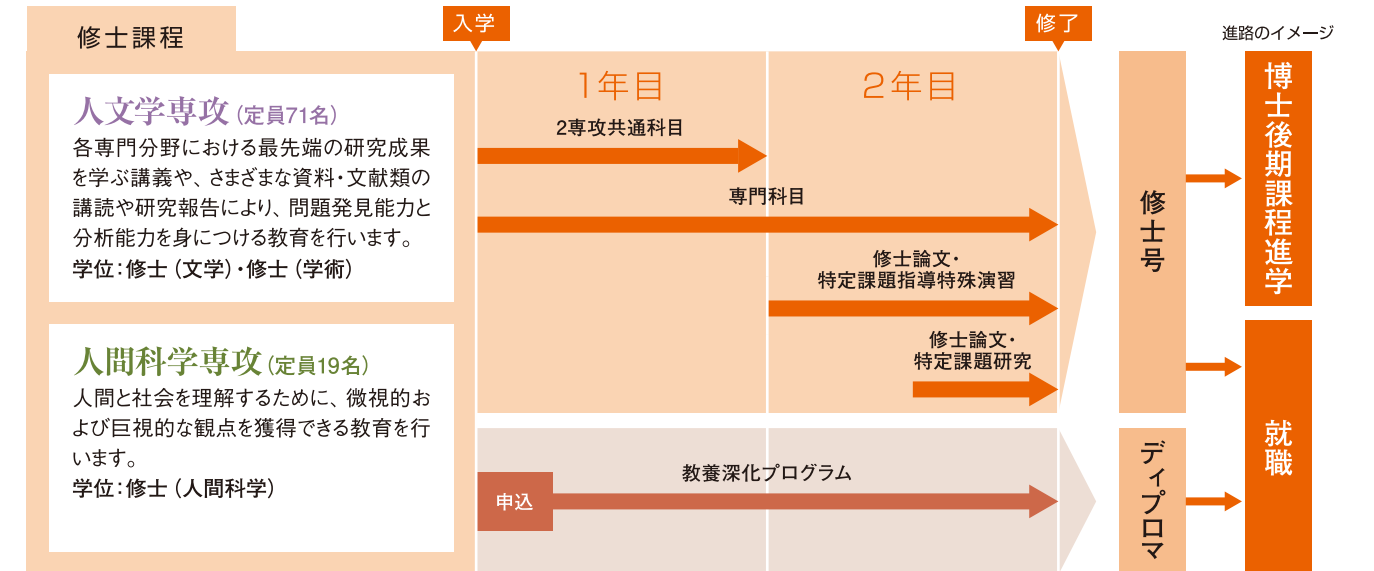
- 地域科学研究室

詳細は p.31

2専攻共通科目を新設。俯瞰的な視野で人文・社会科学を広く学修します。

2019年度新設の「人文社会構造論」「複合環境文化論」「多文化共生論」「総合社会情報論」「研究倫理・論文指導特殊講義」は、各専攻の所属講座が協力して展開する2専攻共通の授業です。専攻をまたいで人文・社会科学の多様な分野を広く学修することを通して、俯瞰的な視野から人間と社会を学ぶと同時に、学際的な研究手法の知識を深めることができます。

● キャリアプランに応じて必要な学修ができる履修モデル



教養深化プログラムの詳細は p.05-p.06

● 文学院が目指す人材像

人文学専攻

- 各領域に関わる理論的あるいは実証的な基礎研究、さらに現代社会の諸問題をめぐる研究において、それぞれの研究の方法を身につけ、これまでの研究を適切に理解するとともに、必要に応じて現地調査を含むデータ収集とその処理・分析的確に行う能力を備えた人材。
- 異文化に対する知識とその深い理解力、さまざまな地域や民族がかかえる現代的課題を具体的に把握する観察力と分析力を基盤とした、高度の専門性を必要とする職業を担う人間としての総合的な能力を備えた人材。

人間科学専攻

- 認知心理学、社会心理学、認知科学、行動科学、社会学、地域社会学、人文地理学、社会生態学に関する専門知識を備えた人材。
- 人間と社会の理解に向けた科学的・実証的なアプローチにより研究を遂行できる能力を備えた人材。

*は2019年度新設の研究室

2019年度から新たな教育プログラムを開設！ 文学院での学びを社会に活かす
教養深化プログラム



高度な専門知識を持った
 即戦力人材に成長

教養深化プログラムの受講希望者は、
 専門研究を深めていくかわら、
 人文・社会科学諸分野の総合的な学修と、
 社会で役立つジェネリックスキル^{※1}を学修することにより、
 高度な専門知識を有し、社会で即戦力となる
 人材へと成長していきます。
 博士後期課程の学生にとっても
 幅広いキャリアへの扉が開けます。

※1) ジェネリックスキル
 社会人として活躍するための能力のこと。具体的には「知識活用力」、「課題解決力」、
 「コミュニケーション力」、「チームワーク・リーダーシップ」等の社会で役立つ汎用的な
 力を指す言葉として使われています。

プログラムの特徴

人文・社会科学の
 総合的な学修

文学院を含む文系6大学院を
 横断する学びで
 「考える力」「書く力」「読む力」
 「発表する力」「総合する力」の
 レベルアップを目指します。

文理融合・
 学際的な学修

数理的思考やさまざまな
 データの分析及び活用方法を
 学修するとともに、
 自然科学分野の最先端の
 知に触れることができます。

社会と繋がる
 実践を重視

人材育成本部、キャリアセンター、
 CoSTEP^{※2}と連携した
 実践的なプログラムにより、
 高度なジェネリックスキルが
 身につきます。

※2) CoSTEP
 北海道大学高等教育推進機構科学技術コミュニケーション教育研究部門。科学技術の専門家と市民の橋渡しをする人材を育てる、教育研究組織。

受講の流れ

北海道大学大学院 入学

修士課程
 博士後期課程

- 文学院
- 経済学院
- 教育学院
- 国際広報メディア・観光学院
- 法学研究科
- 公共政策学教育部

教養深化プログラム申込

原則として希望者全員が参加できます

教養深化科目群 [プログラム生限定科目] (10単位以上)

● 教養深化特別演習 (基礎・総合)

基礎: 多角的に分析し複合的に把握する能力を身につける。

- (授業例) ■ 古典を読む
 ■ 文章作成と表現の技術
 ■ 伝える媒の技術

総合: 基礎で習得した能力を実践を通じてさらに向上させる。

- (授業例) ■ ニセコ・フィールドスタディ
 ■ 修学旅行の企画を立てる

● サイエンスリテラシー特別演習

数理的思考とデータ処理・活用法を知り、
 自然科学研究の最先端に触れ、的確に伝えるスキルを学ぶ。

- (授業例) ■ 人文社会科学からみたデータ
 ■ 科学と社会
 ■ デジタルクリエイティブ基礎



ジェネリックスキル科目群 [大学院共通授業科目] (4単位以上)

● ジェネリックスキル特殊講義

社会に必要な考え方や実践的なスキル (マーケティング、マネジメント、プレゼンテーション等) を
 身につける。

- (授業例) ■ キャリアマネジメントセミナー

● ジェネリックスキル特別演習

第一線で活躍するゲストスピーカーの講演等を通じて、自身のキャリアの可能性を考える。

- (授業例) ■ キャリア形成 (集中講義)

修了要件を満たすとディプロマを取得できます。

国内外の企業、公的機関等で活躍できる人材に!

支援制度

この充実度は北大文学院ならではの 研究キャリアを国際的かつ豊かに積み重ねることができる支援制度

北海道大学大学院文学院には、独自の研究支援制度と豊かな研究環境が揃っています。「国際的な研究キャリアを築きたい」という高い志と、「経済的な負担をできるだけ軽くしたい」というリアルな研究生活事情に応える充実の支援環境を存分にご活用ください。

若手研究者を多角的にサポートしています。

国際学会・全国学会に参加したい

出張旅費支援

「共生の人文学」プロジェクト(Graduate Grant Program)

大学院生の国際学会・全国学会での研究発表に対する旅費を支援しています。「北海道から参加するという経済的な負担を軽減してくれる」と利用者に好評です。資料調査や現地調査に対する旅費支援も行っています。

利用者の声

学会発表への意欲を後押し
応募期間と学会開催日を要チェック



言語科学研究室
博士後期課程3年
中村 真衣佳
NAKAMURA Maika

私の専門は言語学です。「子供が溺れかけだ。」のように名詞文でありながら動的な解釈が生じる言語現象に着目して統語論と語用論の観点から研究しています。出張旅費支援制度は修士課程1年の12月に神戸市で開催された日本語文法学会で口頭発表するために利用し、2度目は修士課程2年の3月に東京都内で開催された社会言語科学会に使っています。北海道から全国学会に参加する際に、旅費の心配をせずに学会発表に集中できるというのは大変有り難いことです。おかげで1度目の利用で学会発表した内容を発展させ執筆した論文が、文学院の『研究論集』に掲載されました。申請の準備は早めに取り掛かることが大切です。年間の応募期間が4期に区分されており、指導教員の先生にも所見をご記入いただくやりとりが発生します。学会発表後に速やかに提出する報告書も含めて本制度の利用となります。私の場合、2度利用したことで、北海道大学の一員として研究活動をしているという自覚が芽生えました。みなさんも入学したらすぐに本制度の応募期間と関心ある学会の開催日程を確認して、アクティブな学会発表の計画を立てることをお勧めします。

使ってよかった!

キャリアアップの実感

一度目の学会発表をもとに論文を執筆し『研究論集』に掲載。二歩も三歩も進む推進力に。

英文ジャーナル等に投稿したい

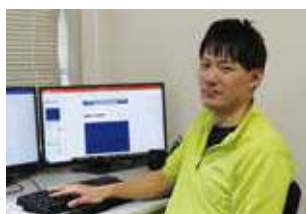
校閲費支援

「共生の人文学」プロジェクト(Graduate Grant Program)

国際学会・国際研究集会での発表及び国際学術雑誌や文学院の英文ジャーナル[※]等へ積極的に応募・投稿できるように、発表原稿や投稿原稿の校閲(英文等の添削)料を支援しています。支援回数に制限がないため、本制度を上手に利用しているリピーターもいます。

利用者の声

支援回数に制限なし
ストレスなく研究に専念できます



心理学研究室
博士後期課程1年
前澤 知輝
MAEZAWA Tomoki

私の主な研究テーマは聴覚による空間知覚で、他にも、動物の行動や物の魅力などについて研究しています。修士課程1年生からこれまで4度、学術誌に論文を投稿するために校閲費支援制度を利用しました。本制度の最大の魅力は、なんといっても支援回数に制限がないことです。ただし、1度に使用できる上限額が決まっています、その中におさまるように意識する必要があります。

支援を受けた2本の論文のうち、ひとつが学術誌で受理されました。もうひとつも現在査読中で、引き続き本制度を利用する予定です。支援回数に制限がないということは、1年のうちに執筆できる本数に金銭面での制限がかからないということでもあります。今の執筆作業を進めながら、並行して次に取り掛かることも不可能ではありません。また本制度は国際会議等での予稿にも適用できるので、「現在支援を申請中の論文があるから、学会分の校閲費用は自己負担しなければならぬ」といったことを気にせず研究に専念することができました。海外誌への論文投稿に英文校閲は必須ですし、校閲は自分の英語力アップにもつながります。今後もぜひ持続してほしい制度です。

※文学院および文学研究院が発行する雑誌『研究論集』、Journal of the Faculty of Humanities and Human Sciencesでは、大学院生の論文発表の場を設けています。

使ってよかった!

キャリアアップの実感

校閲後の論文が学術誌で受理。書けば書くほど、英語力も磨かれます。

学振の特別研究員に応募したい

申請書の書き方セミナー

文学院では、学術振興会特別研究員(DC・PD)になるための申請書類の書き方セミナーおよび相談会を開催しています。本セミナーでは特別研究員に採択された先輩の体験談や審査員経験を持つ教員の話聞くことができ、参加者満足度は毎年95%を超えています。

利用者の声

求められる水準の高さを知る
余裕をもったスケジュール管理が鍵



哲学倫理学研究室
博士後期課程3年
小林 知恵
KOBAYASHI Chie

主に英語圏の倫理学の中でも、「よい」「正しい」といった言葉をもつ意味や機能に着目して、人間と道徳の関係について研究しています。申請書の書き方セミナーは2回受講しました。研究室の先輩の申請書を読ませていただいても作成のプロセスがイメージできずに悩んだ時期があり、採択者の方々からの具体的なアドバイスを聞き取ったのが、受講動機です。申請書作成は論文執筆とは異なり、分野外の人にも研究内容を分かりやすく伝えることが重要で、自分の研究の意義や新規性を積極的にアピールしたと語る採択者のお話に、求められる水準の高さを実感しました。

学振特別研究員の申請書作成にあたっては締切よりかなり早めに完成できるように留意しました。私の評価書を作成いただく指導教員の先生に前もって申請書を見ていただいたり、先輩や後輩に添削を頼むなど、余裕をもったスケジュールで準備にあたり、無事採択に至りました。セミナーの内容を活かして民間財団の留学奨学金も獲得でき、自身の研究とキャリアに弾みをつけることができました。現在悩んでいる方は一人で抱え込まないで、ぜひ本セミナーの情報提供やフィードバックを受けてみてください。

使ってよかった!

キャリアアップの実感

学振も民間の留学奨学金も採択されて次のステージへ。中長期的キャリアの追い風に。

質・量ともに国内屈指の文献資料 学外でもアクセス可能な電子ジャーナル

- 北海道大学附属図書館本館と北図書館に加えて、文学部図書室を含む16の部局図書室があり、総蔵書数は約378万冊。
- 院生各自が研究に必要な図書を購入できる「院生図書費」を確保。
- 「電子ジャーナル」は、北大生ならいつでもどこからでも閲覧とプリントアウトが可能。



▲文学部図書室は蔵書約27万冊、雑誌約5,100種を所蔵。

国境を越え世界の息吹を実感 専門研究を深める国際交流・留学制度

- 北海道大学では51ヵ国・地域の198大学等と大学間交流協定を締結(2020年2月現在)。
- 文学院独自の留学制度もあり、語学の習得や国際的な研究を後押し。
- 大学院生の交換留学先は、部局間交流協定校の英国のサセックス大学、フランスのパリ大学、ドイツのデュースブルク・エッセン大学、クロアチアのザグレブ大学他、大学間交流協定校では、吉林大学、ペラダニア大学、サンクトペテルブルク国立大学、モスクワ国立大学、サハリン国立大学、イルクーツク国立大学、極東連邦大学、マサチューセッツ大学、アルバータ大学など多くの大学への交換留学実績あり。

大学院生の経済的負担を軽減 TA・TF・RA採用者に給与を支給

- ティーチング・アシスタント(TA)制度 修士課程・博士後期課程対象
- ティーチング・フェロー(TF)制度 博士後期課程対象
- リサーチ・アシスタント(RA)制度 博士後期課程対象

豊かな環境が育む研究成果 栄えある受賞者が続々輩出

〈2019年度 受賞者情報〉

- 日本中国学会賞(哲学・思想部門) 吉田勉さん(博士後期課程)
- 日本心理学会 優秀発表賞 伊藤資浩さん(博士後期課程)
- 日本心理学会 特別優秀発表賞 横山実紀さん(博士後期課程)
- 日本人間行動進化学会 若手発表賞 中田星矢さん(修士課程)
- 日本社会心理学会 若手研究者奨励賞 中田星矢さん、前田友吾さん(修士課程)
- 日本基礎心理学会 優秀発表賞 前澤知輝さん(修士課程)、伊藤資浩さん(博士後期課程)
- 日本哲学会 若手研究者奨励賞 安田将さん(博士後期課程)
- 「野生生物と社会」大会 優秀ポスター賞 野瀬紹未さん(修士課程)
- 林業経済学会 学生論文賞 澤井啓さん(修士課程)

Division of Humanities

人文学専攻

人文学を総合的かつ領域横断的に学ぶ

北海道だから学べる
豊かな人文学の
世界がここに。

2019年度
新設

考古学研究室、文化人類学研究室、博物館学研究室、アイヌ・先住民学研究室の4研究室

思想・文化・歴史・地域・言語・文学の領域を幅広くカバー

■ 主な講義題目

哲学倫理学研究室	■ 現象学と意識・認知の哲学 ■ 現代規範倫理学・メタ倫理学 ■ 非古典論理学研究 ■ アリストテレス研究 ■ 哲学・倫理学発表演習 (エニグマ論)
宗教学インド哲学研究室	■ 宗教学と死生学・生命倫理 ■ 仏教学専門文献講読 ■ 新約聖書原典及び初期キリスト教文献講読
日本史学研究室	■ 明治憲法体制と国家の運営 ■ 植民地朝鮮の社会と文化 ■ 近世蝦夷地在地社会論 ■ 律令制と古代の社会 ■ 中世日本社会論 ■ 近代北海道政治史研究
東洋史学研究室	■ 中国史の諸問題 ■ マグリブ・アンダルス史の研究 ■ 中国前近代史研究
西洋史学研究室	■ 西洋古代史研究 ■ 現代歴史学の諸問題 ■ フランス近現代の国家と社会 ■ アメリカ史研究の射程 ■ ヨーロッパ中世・近世史
考古学研究室	■ 考古学と人類学 ■ 考古学と考古科学 ■ 環境考古学と動物考古学 ■ 礼文華遺跡発掘調査
文化人類学研究室	■ Repatriationと脱植民地化の公共人類学 ■ 自然を描く ■ 身体と生成変化の人類学
芸術学研究室	■ 西洋美術史研究の現在 ■ 芸術学研究報告
博物館学研究室	■ 博物館と市民・地域社会 ■ コレクションと展示会の諸相 ■ ユニバーサルミュージアム考 ■ 人間と動物の関係史
欧米文学研究室	■ Scholar and Scholarship ■ フランス文学研究の諸問題 ■ 西洋古典古代・古代キリスト教をめぐる諸問題 ■ ロシア文学理論研究 ■ アメリカ文学研究
日本古典文化論研究室	■ 近松と海音 ■ 上代文学研究 ■ 堤中納言物語研究 ■ 中世文学研究
中国文化論研究室	■ 「論語注疏」研究 ■ 「点石齋画報」研究 ■ 民国文人研究 ■ 「朱子語類」研究
映像・現代文化論研究室	■ ポストコロニアルの文学 ■ 映像理論 ■ 現代文芸理論の研究 ■ 映像解析の諸相 ■ 戦中の記憶 ■ メロドラマ映画論
言語科学研究室	■ アイヌ語学の諸問題 ■ 認知文法概説 ■ フランス語・英語対照統語論 ■ 日本語研究のトピックス ■ 日韓対照研究 ■ ドイツ語学・ゲルマン語学演習 ■ ロシア語学・スラブ語学の諸問題
スラブ・ユーラシア学研究室	■ ユーラシア境界研究 (英語文献講読) ■ Soviet History ■ ロシア文化論 ■ ロシア帝国論 ■ 中欧・バルカン半島の言語と社会 ■ 中東欧比較政治論 ■ スラブ・ユーラシア地域の経済 ■ 中央ユーラシアとロシアの政治
アイヌ・先住民学研究室	■ アイヌ・先住民政策史 ■ 先住民考古学の理論と実践 ■ アイヌ・北方先住民の宗教 ■ 先住民族と自然環境 ■ 先住民族と言語学 ■ アイヌ・北方先住民族史 ■ 先住民族と文化資源

■ 修士・博士研究テーマ例

哲学倫理学研究室	○ 修士 「ロールズ「正義論」は障害者を包摂するかー拡大された社会的協働の射程についての一考察ー」, 「後期西田哲学の宗教の論理について」 ● 博士 「経験の根源-トマス・アクィナスの形而上学」
宗教学インド哲学研究室	○ 修士 「経典の浄土思想-「般舟三昧経」との関連を中心に-」, 「20世紀のフェミニスト宗教研究再考-男性中心主義批判の比較を中心に」 ● 博士 「ヨシヤの改革:「エサルハドン王位継承誓約文書」と「申命記」
日本史学研究室	○ 修士 「第一次幕府期における蝦夷地警備」, 「日本古代における衛士」 ● 博士 「室町時代における政治秩序の形成と顕宗・禪宗寺院の歴史的位置」
東洋史学研究室	○ 修士 「ティムール朝末期における辺境の再編」, 「清末禁煙運動の研究」 ● 博士 「近世福建漳州地域の陳元光信仰と宗族の形成」
西洋史学研究室	○ 修士 「フランス革命期におけるふくろう党像の再検討-ウール=エ=ロワール県の事例から-」, 「17世紀中葉におけるスウェーデン王と帝国国制」 ● 博士 「近世アルゼンチンをめぐる権力秩序-神聖ローマ皇帝・フランス王・帝国等族-」
考古学研究室	○ 修士 「噴火湾北岸域における統縄文期前半の土器群の研究-豊浦町小幌洞窟遺跡-礼文華遺跡における土器群構成分析法の実践-」, 「クワとスキに関する考古学的考察」 ● 博士 「古典前期マヤにおける国家形成の研究-三足円筒土器と「テオティワカン」の影響-」
文化人類学研究室	○ 修士 「ネパールの災害エスノグラフィ」, 「日本におけるイスラエル・ディアスポラ-4人のライフストーリーをもとに-」 ● 博士 「(沈黙)のオートエスノグラフィ-「サイレント・アイヌ」におけるサバルタン化のプロセスとポストコロニアル状況-」
芸術学研究室	○ 修士 「既製品と芸術空間」, 「蔡國強の作品におけるエネルギーの顕在化」 ● 博士 「狩猟塔-レ・デ・ラ・バラダの絵画装飾研究-16, 17世紀のスペイン宮廷における君主教育と宮廷絵画ディエゴ・ベラスケスとの関連から-」
博物館学研究室	○ 修士 「地域の博物館における郷土資料館の特徴-札幌市内の郷土資料館の事例から-」, 「歴史民族学の観点からみるアイヌとフクロウの関係史-民族調査の記録と文献史料の比較・検討を通して-」 ● 博士 「エゾオオカミをめぐる歴史と文化:日本における研究史およびオオカミ観形成過程の検討」
欧米文学研究室	○ 修士 「見ることから触れることへ-フランナリー・オコナー作品における触覚イメージ」, 「ロシア文化における笑い-日本人アネドットを用いた分析-」 ● 博士 「終わりなき恣意的な神の追跡:メルヴィルによる永遠性の呼び起こし」
日本古典文化論研究室	○ 修士 「諏訪社縁起の展開と古代テキスト群受容の実態の研究」, 「太閤記物語本考」 ● 博士 「中世の知と文芸」
中国文化論研究室	○ 修士 「清代における清雅詞派の受容の考察-姜夔を中心に-」, 「六朝期における陶淵明評語-「古今隠逸詩人の宗」をめぐって」 ● 博士 「横井小楠の経世思想研究」
映像・現代文化論研究室	○ 修士 「アニエス・ヴァルダ映画論」, 「横光利一「旅愁」論-歴史化される現在-」 ● 博士 「川端康成文学における絵画」
言語科学研究室	○ 修士 「ロシア語と日本語における「視線」の概念メタファーの比較」, 「フランス語・イタリア語・スペイン語の相互行為における呼称代名詞の転換について」 ● 博士 「アイヌ語の複雑述語の研究」
スラブ・ユーラシア学研究室	○ 修士 「非承認国家とトランスナショナルイズム:現代アブハジア問題におけるチェルケス・ファクター」, 「日本企業によるロシア市場進出の理論的再検討」 ● 博士 「アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス-生産主義理論とその具象-」

哲学宗教学講座

研究領域としては、哲学、倫理学、宗教学、インド哲学の各分野を含みます。各分野の主要テキストと本格的に取り組むには複数外国語の習得が欠かせず、古典語が必要となる領域もあります。人類の連綿たる営為の結晶である哲学や宗教をめぐるさまざまな考察の吸収・継承・展開を目指して、不断に思考力・感性・表現力を磨くことが要求されます。伝統的な原典研究から、先端的・理論的な研究、宗教現象の実証的研究、さらには生命・環境倫理学、AIや神経科学との学際的研究など現代の諸問題に関わる研究まで、多様な研究が行われています。



● 哲学倫理学研究室



● 宗教学インド哲学研究室

歴史学講座

「日本史学研究室」「東洋史学研究室」「西洋史学研究室」「考古学研究室」から構成されています。歴史学は、いまこの世界が成り立っている所以を過去に遡って探究する学問です。また、それと同時に、現代の世界の在り方を相対化するための手がかりを過去に求めようとする学問でもあります。そしてなによりも、史資料を通して過去の人々との「対話」を楽しむ学問です。当講座は、日本はもちろんのこと世界中の幅広い地域にわたって、このような試みのための場を提供しています。



● 日本史学研究室



● 東洋史学研究室



● 西洋史学研究室



● 考古学研究室

文化多様性論講座

この講座では、「文化人類学」、「芸術学」、「博物館学」という性格が異なる3つの学問分野の教員が、〈文化多様性〉と〈フィールドワーク〉という共通項で教育・研究を行います。人類の文化の多様性と共通性を研究する「文化人類学」。古今東西の美術をはじめ、音楽、文芸、演劇などの多様な芸術を対象に研究する「芸術学」。そして、これらの成果を、展示を含めた事業を通して、多様なミュージアムでどのように展開するかを研究する「博物館学」。これらの研究を、机上で文献をひもとくだけでなく、実際にその現場で考えるフィールドワークを通して進めています。



●文化人類学研究室



●芸術学研究室



●博物館学研究室

表現文化論講座

欧米文学、日本古典文化論、中国文化論、映像・現代文化論の4研究室によって構成され、文学・思想・映像・大衆文化などを含む幅広い文化を教育・研究の対象とします。英語圏、フランス、ロシア、西洋古典、中国、日本の各地域と言語、および古代から現代までの時代にわたって、人間が表現してきた豊かな作品を、多様な批評理論・映像論・文化理論に基づき、理論的かつ具体的に分析し評価することを主眼とします。言語文化や視覚メディア文化を深く研究したい方を歓迎いたします。



●欧米文学研究室



●日本古典文化論研究室



●中国文化論研究室



●映像・現代文化論研究室

言語科学講座

言語を科学的に捉える視点から、一般言語学と個別言語学について、記述的、理論的、実証的、応用的な研究を行います。英語、ドイツ語・ゲルマン語、フランス語・ロマンス語、ロシア語・スラヴ語等のヨーロッパ系言語学、朝鮮語やアイヌ語を中心とするアジア系言語学、国語学、日本語学などの個別言語学のほか、言語学の多様なアプローチでことばを研究しています。歴史言語学や社会言語学、音声・音韻・形態・統語・意味・語用の全般に関して言語現象を広く多層的に学びます。



●言語科学研究室

スラブ・ユーラシア学講座

スラブ・ユーラシア（ロシア・中央ユーラシア・東欧）は、豊かで多様な文化を持ち、現代世界を考察するうえでも欠かせない地域です。本講座は、この地域の研究の世界的拠点であるスラブ・ユーラシア研究センターの教員が担当しています。センターが所蔵する日本最大規模の図書・資料を利用し、センターに滞在する国内外の研究者との交流や、頻りに開催される国際シンポジウム・研究会から刺激を受けながら、歴史、政治、経済、国際関係、文学・文化、言語、人類学などの諸分野を研究することができます。



●スラブ・ユーラシア学研究室

アイヌ・先住民学講座

世界には70カ国以上の国におよそ5000の先住民が暮らしています。先住民学は、ほかの学問領域と比べると比較的新しい研究領域ですが、研究課題は幅広く、先住民を取り巻く文化資源、生活環境、経済社会開発など様々な課題が含まれます。研究の手法も課題ごとにそれぞれ独自の手法が必要であり、多角的な検討が求められます。アイヌ・先住民学講座では、歴史学・言語学・文化人類学・博物館学・法学・考古学の教員が研究しており、アイヌ民族と世界の先住民に関する研究を領域横断的に学ぶことができます。



●アイヌ・先住民学研究室

哲学宗教学講座 哲学倫理学研究室

哲学倫理学研究室では、古代ギリシア以来の西洋哲学・倫理学の原典研究をはじめ、分析哲学・現象学などの現代哲学や日本哲学、論理学やメタ倫理学などの理論的研究、応用倫理学諸分野、神経科学やAI・ロボティクスとの学際的研究など、古今の様々な理論や諸問題に関する研究・教育を行っています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

近藤 智彦 准教授

KONDO Tomohiko

研究内容

西洋古代哲学、特にヘレニズム・ローマ哲学を中心に研究しているが、近年は西洋古典受容の共同研究にも取り組んでいる。今後はこれらの研究を軸に、西洋思想史の再構築や倫理学理論の再編成の試みに参加したいと考えている。



▲プラトン『国家』の諸近代語訳や注釈。こうした先行研究を導きとして、ときには批判しながら、あるべき解釈を模索していく。

「白熱」議論のヘレニズム哲学 古典解釈から己の限界を広げる

古代ギリシア哲学が成熟を迎えたヘレニズム時代には、ストア派に代表される様々な学派がしのぎを削り、白熱した議論が展開されました。幸福をもたらすのは徳か快楽か、真の自由、真の正義とは何か、性／愛のあるべき(ありうる)形とは—古代の哲学者たちによるこうした様々な問ひかけに、文献解釈を通して迫りながら、現代的な観点からの捉え直しを試みています。

今も昔も思想が時代の影響を免れることは困難ですが、その中でも自分がとらわれている物の見方に固執せず、他の考え方の可能性を見出すために、われわれは古典をひもときます。このようにして「自分の限界を広げる」試みに、思想史という学問の、そして思想史研究を通じた哲学・倫理学へのアプローチの、比しがたい魅力を感じています。



▲古代ギリシア・ローマの哲学・思想に深く関わってきたデルフォイの神域。今も訪れる人に古代の息吹を感じさせてくれる。

基礎を作る確固たる方法論と 自分色を出すチャレンジ精神

研究に必要な姿勢の一つ目は、確固たる方法論を身につけることです。単なる「自分なりの読み」を振りかざすのではなく、まずは研究者が到達すべき「学問的な読み」の水準にまでたどりつく。そのための基本的な知識の習得をおろそかにしない姿勢が大切です。そして二つ目は、そこから先に進むために「まだ他の誰も気づいていない面白さ」を探るチャレンジ精神を持つこと。この二段構えで自分ならではの研究を進めていってほしいと思います。北海道大学の哲学・倫理学研究室は、私が専門とする古典の文献研究から現代社会の諸問題に切り込む応用倫理学まで、両極を揃えた幅広さが魅力です。これもまた「他の考え方の可能性を見出す」哲学・倫理学を学ぶにふさわしい環境なのではないでしょうか。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

蔵田 伸雄 教授 KURATA Nobuo

■研究分野
応用倫理学、現代英米倫理学、西洋近現代哲学(特にカント)

佐野 勝彦 准教授 SANO Katsuhiko

■研究分野
非古典論理、哲学的論理学

田口 茂 教授 TAGUCHI Shigeru

■研究分野
西洋近現代哲学(特に現象学)、近代日本哲学、意識の学際的研究

村松 正隆 准教授 MURAMATSU Masataka

■研究分野
近現代フランス哲学、近現代倫理学

近藤 智彦 准教授 KONDO Tomohiko

■研究分野
古代ギリシア・ローマ哲学、倫理学

野村 恭史 助教 NOMURA Yasushi

■研究分野
現代分析哲学

哲学宗教学講座 宗教学インド哲学研究室

宗教学インド哲学研究室は、新約聖書学、宗教学、死生学、仏教学などを研究分野とする教員によって構成されており、所属する大学院生は、関連領域の研究職や深い専門知識を必要とする一般職への就職をめざし、上記分野に関連したテーマについて研究を深め学位を取得していきます。

Lab.letters 教員からのメッセージ

宮嶋 俊一 准教授

MIYAJIMA Shunichi

研究内容

宗教学理論、方法論、学説史研究。及びそれを様々な宗教現象の分析・比較研究へ応用することの試み。「スピリチュアリティ」研究、宗教と生命倫理について死生学的な視点を含めた研究、いのちや環境をめぐる問題に対する近代文明批判の立場からの研究など。



▲ハイラーの宗教理論を研究した『祈りの現象学』(ナカニシヤ出版)を2014年に出版。ハイラーの著書『祈り』(英語版)の表紙を飾った鳩のアイコンを本書でも形を変えて継承した。

古今東西の宗教現象 に目を向け 「祈り」を考えるハイラーに共感

「祈り」という単語からすぐにキリスト教を連想する人は多いと思いますが、ドイツの宗教学者フリードリヒ・ハイラーは古今東西から「祈り」と呼ぶ宗教現象を集めて分析した大著『祈り』を発表し、第一次世界大戦後のドイツ国民に広く受け入れられました。これまでハイラーは西洋中心主義的であると批判されてきましたが、宗教学における比較研究の重要性を鑑みて、近年では『祈り』から肯定的に継承すべきものを読み取ろうとしています。

北海道大学にはキリスト教研究の伝統がありますが、各研究室の多彩な先生方との連携により研究の幅は広がります。総合大学である利点を活かせば死生学の問題に関して医学部との共同研究も可能で、豊かな膨らみのある宗教研究が実現できる環境です。



▲2007年に訪れたネパールのカトマンズ。現地の宗教施設を訪ね、直接話を聞いてきた。

心酔と無関心の両極から逃れ 理解するための狭間に立つ

一般に信仰に基づく研究では「私」の問題が大きな比重を占めますが、宗教学は「彼/女ら」が問題をどう受け止めているのかを探る、他者理解を目指す学問です。学生指導ではつねに、研究対象に対して学問たりうる適切な距離を保つよう自覚を促しています。日常生活においても、ある事柄に対して「心酔」と「無関心」の両極端では理解が深まりません。両極の狭間で立ち位置を模索しつつ対象と向き合うという、人生においても大切な姿勢を宗教学は教えてくれます。

学生の皆さんには、研究室に閉じこもらず、海外を含めた「外」に飛び出す楽しさを、知ってほしいと思います。私自身、ドイツへの留学経験もありますが、海外からの留学生も、ぜひ北大で宗教学を学んで欲しいと思います。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

佐々木 啓 教授 SASAKI Kei

■研究分野
新約聖書学、宗教学

林寺 正俊 准教授 HAYASHIDERA Shoshun

■研究分野
仏教学、仏教思想史

宮嶋 俊一 准教授 MIYAJIMA Shunichi

■研究分野
宗教学、死生学

歴史学講座

日本史学研究室

日本史学研究室は、古代・中世・近世・近現代についての、日本および中国大陸・朝鮮半島・北方地域を視野に入れた実証的研究を特徴としており、これまで多数の研究者を輩出してきました。学内には日本史分野の専門書が揃い、史料（北方史一次史料および各時代・各分野の刊本資料・復刻版等）も豊富に集積しており、研究環境に恵まれています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

川口 暁弘 准教授

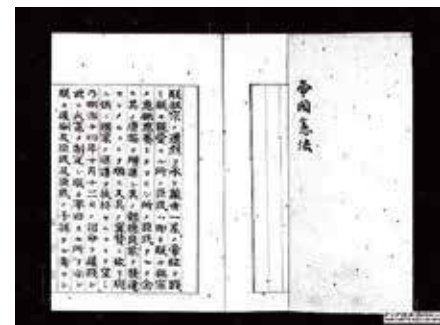
KAWAGUCHI Akihiro

研究内容

明治憲法下の国家運営の諸相に関する、思想・制度の問題をふまえた政治史研究。



▲明治22年2月5日に印刷された大日本東京吾妻橋真画「憲法発布式大祭之図」三枚続の一部(川口准教授所蔵)



▲大日本帝国憲法(明治憲法)の冒頭。出典: JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.A03020029600、御署名原本・明治二十二年・憲法二月十一日・大日本帝国憲法

アメリカ18回、スイス119回
日本ではまぼろしの憲法改正

世界各国の憲法改正状況を調べると、アメリカは18回、ドイツは43回、スイスにいたっては119回も、憲法を改正しています。わが国では1回です。日本国憲法は、大日本帝国憲法の改正によってできたものです。ところがこの事実は、日本人の歴史認識になっていません。まぼろしの憲法改正なのです。一方、1890年に施行された大日本帝国憲法は1946年まで一度も改正されたことはありません。1947年に施行された日本国憲法は本日ただいまにいたるまで、一度も改正されていません。どうやら私たち日本人は『一度作った憲法を改正することなく使い続ける』特異な傾向を持っているようです。これらの興味深い現象の原因を究明するのが、私の仕事です。

自分がおもしろいと思える
研究テーマで常識を再検討

「時代の機微に応じて憲法を改正する」という世界の常識が実は日本には当てはまらないように、我々を取り巻く常識を再検討することで見えてくる世界のありようを自力で明らかにするのが、この学問の醍醐味です。題材選びを他人に委ねたり研究の近道を安易に追いかけてたりしては、残念ながら自身の成長につながりません。幸い北海道大学には落ちついてものを考えられる静かな環境があり、励まし合える先輩後輩もいます。私も皆さんの研究意欲を刺激できるように明治憲法史への尽きない関心を盛り込んだ授業で応援しています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

権 錫永 教授 KWEON Seok-Yeong

■研究分野
日本近代思想史、植民地朝鮮文化史

橋本 雄 教授 HASHIMOTO Yu

■研究分野
日本中世史、東アジア海域史

井上 敬介 助教 INOUE Keisuke

■研究分野
日本近代史、政治史、北海道史

白木沢 旭児 教授 SHIRAKIZAWA Asahiko

■研究分野
日本近現代史、日本経済史

小倉 真紀子 准教授 OGURA Makiko

■研究分野
日本古代史、土地制度・財政史

谷本 晃久 教授 TANIMOTO Akihisa

■研究分野
日本近世史、北海道地域史

川口 暁弘 准教授 KAWAGUCHI Akihiro

■研究分野
日本近代史、明治憲法史

歴史学講座

東洋史学研究室

東洋史学研究室は、広く東洋諸地域を対象に歴史研究を行っています。地域は広大で使用する言語は多様です。漢文・現代中国語・ペルシア語・アラビア語・トルコ系諸語で書かれた膨大な史料がひっそりと皆さんの解説を待っています。縦書きや横書きで、竹簡・木簡・紙などに書かれた史料群が。

Lab.letters 教員からのメッセージ

佐藤 健太郎 准教授

SATO Kentaro

研究内容

マグリブとアンダルス、つまりイスラーム期の北アフリカとスペイン・ポルトガルを対象に、ムスリム社会の歴史を研究している。最近では、14世紀の歴史家イブン・ハルドゥーンの自伝の翻訳にも取り組んでいる。



▲アフリカ最北端の町セウタからイベリア半島を臨む。写真中央にそびえるのは海峡と同名の岩山ジブラルタル。わずか1時間の船便で対岸に到着する。(佐藤准教授撮影)



▲モロッコの街角で売られていた日めくりカレンダー。左上のマスはグレゴリウス暦による「1997年1月1日水曜日」、右上はイスラーム暦「1417年シャアバーン月21日水曜日」、右下は農事暦「農事の12月19日」、左下は礼拝時刻を記したもの。

イベリア半島と北アフリカ
境界線に息づくイスラーム史

キリスト教社会とイスラーム社会が交錯する西地中海は、一元的な視点ではとらえきれない魅力あふれる地域です。私が留学していたモロッコではグレゴリウス暦とイスラーム暦の列記に加えて、古代ローマに由来するユリウス暦をも農事暦として併記するカレンダーが街角で売られていました。百年ほど前まではイスラーム以前の夏至祭・冬至祭に由来をもつアンサラヤヤンナイルという祭りを祝う慣習が、イスラームの祝祭と並んで残っていたこともわかっています。私が重きを置くのは地理的な国境や宗派の境界線よりも、こうした生き生きとした人々の営み。地図上ではイベリア半島と北アフリカに分かれていながら、そこには豊かな多面性が息づく「境界線から見たイスラーム史」を自分なりの視点で掘り下げています。

偶然が「好機」に変わる
院生と指導教員のマッチング

2011年春に北海道大学に赴任し、まったくの偶然ですが私が専門とする14世紀の宮廷政治家イブン・ハルドゥーンを題材にして学部の卒業論文を執筆した院生がいたことに驚かされました。大学院で充実した研究生生活を送るには院生と指導教員のマッチングが非常に重要です。私も本学での思いがけない偶然をさらに「好機」に変えていけるよう全面的に協力する心がまわっています。また、北大のイスラーム研究には長い伝統があり、今も専門の先生がたが複数名おられるという恵まれた環境が続いています。アラビア語の一次史料から浮かび上がる歴史の像が徐々に鮮明になっていく感動の瞬間を、ともに積み重ねていきましょう。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

吉開 将人 教授 YOSHIKAI Masato

■研究分野
秦漢史、中国近現代史、中国民族問題

梅村 尚樹 准教授 UMEMURA Naoki

■研究分野
宋代社会史、思想史

佐藤 健太郎 准教授 SATO Kentaro

■研究分野
中東イスラーム史(特に西地中海地域)

歴史学講座 西洋史学研究室

西洋史学研究室では、古代ローマ史、中近世ドイツ史、イギリスとフランスを中心とした近現代のヨーロッパ史、アメリカ史をカバーし、それらにおける政治史、経済史、社会史、文化史の研究をしています。また、ジェンダーやナショナリズムや移民といった新たなテーマにも取り組んでいます。

Lab.letters 教員からのメッセージ

村田 勝幸 教授

MURATA Katsuyuki

研究内容

20世紀後半以降のアメリカ社会を対象に、移民(史)、人種主義、エスニシティ、ナショナリティ(およびトランスナショナリティ)、都市空間などに注目して実証研究を行っている。



オバマフィーバーが伝える 歴史の声に耳を澄ませよう

2009年1月のオバマ大統領の就任スピーチを聞いて黒人の中年女性が流した涙にはどんな意味があるのでしょうか。遠く遡ると奴隷制や人種差別・暴力など黒人社会に綿々と受け継がれてきた“集合的記憶”が彼女個人の涙の中に結晶化していたわけです。

私のゼミでは、このようにアメリカに関わるさまざまな事柄を「アメリカン・スタディーズ」の枠組みで歴史的に位置づけ、政治・経済・文化などさまざまな角度からのアプローチを試みています。日本に多くの影響をもたらしているアメリカを好き嫌いの尺度で決めつけず、その先に踏み込むことで新たな世界観が立ち上がることでしよう。



▲2009年のアメリカ出張時、店頭ではオバマTシャツが販売され、チャイナタウンは活気に満ちていた(村田教授撮影)。

好奇心の泉を枯らさない 問ひかけのバトンリレー

オバマは面白かった2018年の映画として、「ブラック・クラウンズマン」や「ブラックパンサー」とともに是枝裕和監督の「万引き家族」を挙げていました。関心の広さと思考の柔軟性にとっても驚きました。音楽や映画、ファッションなど関心を持つ入り口はどこからでもいいのです。好奇心の泉を枯らさずに、自分の中に生まれた問ひかけを豊かに育てていってください。いい問ひかけとは、バトンのようなもの。歴史の流れの中で前後の問ひかけとリンクする広がりを持っています。

私自身、まだ知りたいことは山ほどあります。みなさんとは共に勉強する研究者同士というフラットな立場で北大での日々を過ごしていきたいですね。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

砂田 徹 教授 SUNADA Toru

■研究分野
古代ローマ史

村田 勝幸 教授 MURATA Katsuyuki

■研究分野
アメリカ史、アメリカ研究

長谷川 貴彦 教授 HASEGAWA Takahiko

■研究分野
近現代イギリス史、歴史理論

山本 文彦 教授 YAMAMOTO Fumihiko

■研究分野
ドイツ中世・近世史

松嶋 明男 教授 MATSUSHIMA Akio

■研究分野
近現代フランス史

歴史学講座 考古学研究室

人工遺物・遺構・遺跡研究のトップランナーと、最新の考古科学を駆使する動物・植物考古学、文化財科学・年代測定の専門家により教員が構成される考古学研究室。旧石器時代～近現代、ユーラシア大陸・日本列島～アメリカ大陸という幅広い時期・地域をカバーする充実したスタッフ、大学院生の先端的な研究推進を支援します。

Lab.letters 教員からのメッセージ

小杉 康 教授

KOSUGI Yasushi

研究内容

発見的構造と状況的機能をキーコンセプトとして、日本列島を中心とした人類文化を考古学的に研究する。



▲礼文華遺跡(豊浦町)の考古学実習(発掘調査)風景。

定住する狩猟採集民 サステイナブルな縄文が熱い

現在、「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」は世界文化遺産の登録を目指しており、世界でも「JOMON」研究への関心が高まっています。ではなぜ今、縄文が熱いのでしょうか。従来の人類史においては、狩猟採集・移住の生活から食糧生産を始める農耕・定住へ発展した、という考え方が定説でした。ところが、縄文文化は“定住する狩猟採集民”という独自の文化で1万数千年も継続した文化であることが明らかになってきました。この従来の枠組みにおさまらない、サステイナブルな豊かさを内包する縄文文化が、現代の我々にさまざまな示唆を与えてくれるのではないかと期待されているのです。



▲考古学演習「土器を実測する」の授業風景。

エコミュージアムの実践 人類史的な時間感覚を養う

本研究室では考古学実習として人類遺跡の発掘調査を実施しています。噴火湾北岸域を中心として2000年からは有珠6遺跡(伊達市)で、2006年からは小幌洞窟遺跡(豊浦町)、2012年からは礼文華遺跡(豊浦町)で、夏休みの期間を利用してフィールドワークを続けています。2009年からはこれらの遺跡をサテライトとする「噴火湾北岸縄文エコミュージアム」活動も始めました。また、北大キャンパスの地下には続縄文・擦文文化の遺跡が広がっています。それらを人類遺跡トレールとして整備して、キャンパス・エコミュージアムの実現に向けた活動を、北大埋蔵文化財調査センターと連携して行っています。こうした千や万をもって年数を数える人類史の時間に触れる実習は“日常的には体感できない時間感覚”を養う場でもあり、その感覚をもって社会に貢献できるような人材を輩出できたら、と考えています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

小杉 康 教授 KOSUGI Yasushi

■研究分野
考古学、物質文化論、民俗誌考古学

國木田 大 准教授 KUNIKITA Dai

■研究分野
考古学、文化財科学

高瀬 克範 准教授 TAKASE Katsunori

■研究分野
考古学、植物考古学

高倉 純 助教 TAKAKURA Jun

■研究分野
考古学、文化財科学

江田 真毅 准教授 EDA Masaki

■研究分野
動物考古学、文化財科学

文化多様性論講座

文化人類学研究室

この地球上で人類はそれぞれの自然環境に応じて、多様な文化を育んできました。文化人類学とは、自然と結びついた文化の多様性を、研究者が実際に現場に身をおきながら明らかにする分野です。私たちの慣れ親しんだ世界の外に出て、人類の多様な可能性を知り、これからの地球社会を構想する、そんな自由で創造的な場が文化人類学研究室です。

Lab.letters 教員からのメッセージ

山口 未花子 准教授

YAMAGUCHI Mikako

研究内容

文化人類学、生態人類学の分野から「動物」について研究している。主なフィールドはカナダのユーコン準州。先住民のカスカや内陸トリンギットの人々と動物との関わりについて狩猟や芸術、信仰などに焦点を当てながら調査を続けている。その他に日本の小型沿岸捕鯨、八重山のイノシシ猟なども対象にしている。



▲高校時代から描きためているフィールドノート。調査では「何でも記録する」。右上のラビットファー付きベビーシューズは作り方を教わって自作した。



▲しとめたヘラジカはその場で解体し、気管は木の枝にかけてくる。「風がそこを通ると気管にとどまった壺が息を吹き返し、また肉や皮をつけてヘランカになって戻ってきてくれる」という言い伝えがあるからだ。冒頭の研究内容右横の手描きイラストはこの話を聞いて描いたもの。

動物との関わりを探り 北方の狩猟採集民に密着

動物と人との関わりを知りたい私が研究テーマに狩猟採集民を選んだのは、動物のことを最も熟知している猟師さんにお話を聞くのが一番だと思ったから。狩猟採集民にとって動物は食料や衣類、角・革を使う工芸品にもなれば、歌や文化、宗教観などあらゆる面で深く関わっています。これらの関心事を全て受け止めてくれる、懐の深い文化人類学が「何でも知りたい」私には向いていたのだと思います。同時に寒冷地ほど暮らしの中の動物への依存度が高くなることを考え、日本で北方先住民の研究をするならば、やはり北海道大学が理想の選択肢。フィールド経験が豊富な先生方や充実した図書資料、また現地に近い気候も含めて、これ以上ない研究環境に身を置いています。

人から受け取り、人へ伝える 文化人類学の本質に触れて

カナダでは先住民カスカの古老の狩猟に同行し、自分も見習い猟師として狩猟の技術や動物に関する知識について経験的に教わりました。その方だけが持つ知や技を教わる身としては、しっかり「受け取った」という成果を出したいし、その成果を見てもらいたい。その思いでともに過ごした日々でした。

そうした間柄でしたから、私が大学教員の職に就いたとお知らせしたとき、すごく喜んでくれたんです。自分の教え子である私がさらにまた誰かに伝承する立場になったことが嬉しかったのだと思います。そのときに初めて「人から学ぶ」文化人類学の本質に触れ、カスカの古老から私へ、私から皆さんへと教えを受け継いでいくという自分の役割に自覚がもてたような気がしています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

小田 博志 教授 ODA Hiroshi

■研究分野
人類学、平和研究、自然-人間関係、生命論、エスノグラフィー論

コーカー ケイトリン クリステイーン 准教授 COKER Caitlin Christine

■研究分野
人類学、身体化論、パフォーマンス研究、情動論

山口 未花子 准教授 YAMAGUCHI Mikako

■研究分野
人類学、自然誌、動物論、狩猟研究、北米先住民研究

文化多様性論講座

芸術学研究室

芸術学研究室は、美学、西洋美術史、現代美術史などを専門とする教員による研究室ですが、人間の文化的な営みの精華である多様な芸術作品やその美的経験などを考察の対象として、理論的普遍的哲学的な方法と実証的個別的歴史的な方法とを相携えながら、芸術を巡る総合的な知の構築を目指して研究しています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

谷古宇 尚 教授

YAKOU Hisashi

研究内容

専門は中世後期のイタリア美術。とくに聖堂や修道院建築など、特定の場所との深いつながりをもった絵画をとりあげている。



▲ナボリの修道院回廊にある18世紀のタイル画。修道院は14世紀に建てられた。



▲1966年から1991年にかけて、モスクワやウラジオストクの若き画家たちが集った「シコタングループ」。シコタン（色丹）島やクナシル（国後）島の風景を描いた。

その場所でしか得られない 美術の感動を研究の推進力に

さまざまな感動をもたらしてくれる美術の中でも私の研究対象は、13～14世紀のイタリアの宗教画と20世紀後半にロシアで活動した「シコタングループ」の画家たちです。前者は主に現地の教会や修道院の壁画に見られ、後者はロシア極東の風景を描くなど、どちらも「特定の場所」をよりどころとしている点に解釈の深さ、面白さが潜んでいます。

美術史における作品とは、考古学で発見された土器さながらに重要な一次資料。研究者が現地に行くことで得られる情報や感動は専門研究の推進力となります。この現地主義に加えて、フランス語やイタリア語など対象地域の言語を習得することで研究にさらなる厚みが生まれます。

美術を入口に社会の諸要素を知る 全ての答えは作品の中に

心を奪う色彩や形など、「自分の好きな作品」をきっかけに美術の世界に魅せられていくのはごく自然なこと。しかしひとたび、その「好き」を研究対象にするとなれば作品の形式的な側面だけでなく、歴史や宗教、政治、文学など作品の背景を幅広く学ぶ必要があります。例えばキリスト教について宗教画を入口に知識を深めていくことは欧米社会を理解するための近道にもなります。こうした知識を蓄えたくえで自分の仮説を検証し、結論が出たときにもう一度その作品に立ち返ってみる。当時の人々はそれをどう受け止めていたのか、その答えはやはり作品の中にあるのではないのでしょうか。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

谷古宇 尚 教授 YAKOU Hisashi

■研究分野
西洋美術史(イタリア美術史)

浅沼 敬子 准教授 ASANUMA Keiko

■研究分野
現代美術史

文化多様性論講座

博物館学研究室

博物館学研究室では、今日的なミュージアム・ミッションに対応した新しい価値のあり方や創造について、資料・作品・標本に関する調査研究の方法論に基づきながら、フィールドワークを通して考察して行きます。博物館学的なアプローチの可能性を探りつつ、学芸員養成課程での基礎的な知識のバージョンアップを目指します。

Lab.letters 教員からのメッセージ

鈴木 幸人 准教授

SUZUKI Yukito

研究内容

日本の古典的な絵画作品をおもな対象として、その鑑賞形態を重視する観点から、日本美術、日本文化の特質について考察している。



▲太宰府に左遷され失意のうちに世を去った「菅公」こと菅原道真。後に起きた天変地異は道真の祟りとされた。写真は、(上)金沢市崇徳寺の天神縁起絵巻額の一場面、(下)江戸時代出版の「繪本菅原實記」より。

芸術研究は個人の経験から始まる
仁左衛門から天神縁起研究へ

芸術研究は、“個人の経験”が出发点と考えています。皆さんにも必ずある具体的な経験、そのはじめの感動を大切にしながら、そこからいかに普遍的なテーマを見出し、腕の見せ所です。

私がこれまで取り組んできた「菅公イメージ」研究は、学生時代に見た歌舞伎、先々代の片岡仁左衛門が勤めた「菅原伝授手習鑑・道明寺」への感動が出发点です。

菅原道真は没後、都を騒がす荒ぶる神や雷神、学問の神など実に多面的に神格化されました。その多様で複雑な菅公イメージについて、各地に遺された天神縁起絵の分析から、私なりの答えを見出そうとしています。

「学芸員志望」から発想を広げ
希望に近づく就職活動を応援

芸術の知識や経験は年とともに蓄積していけるもの。今は絶対値が少ない皆さんも今後の行動次第で豊かな経験を積み上げていくことができます。

皆さんの先輩の中には、古典文化の本場である関西に足しげく通った意欲が現地の美術館関係者に認められ、希望どおりの就職を果たしたお手本のような実績を残してくれた人もいます。

芸術に関わる仕事に就きたい、展覧会やイベントの企画に参加したい。将来の夢を実現するためには新聞社や放送局事業部など間口を広く考えることも有効です。各自の能力を発揮できるよう、私もあらゆる角度から応援していきます。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

佐々木 亨 教授 SASAKI Toru

■研究分野
博物館学、文化人類学

山本 順司 准教授 YAMAMOTO Junji

■研究分野
博物館運営、教材開発、太陽系進化学

鈴木 幸人 准教授 SUZUKI Yukito

■研究分野
日本美術史、博物館学

久井 貴世 准教授 HISAI Atsuyo

■研究分野
動物に関する歴史と文化、博物館学、歴史鳥類学

表現文化論講座

欧米文学研究室

ヨーロッパや英語圏の文学を堪能します。西洋古典文学・フランス文学・ロシア文学・英語圏文学などの伝統的研究を縦糸に例えると、横糸は文献学・文化歴史表象・比較文学・文学理論などの横断的手法。多様な糸で紡がれた文学の絨毯に乗り、想像と創造の世界に旅立ちましょう。

Lab.letters 教員からのメッセージ

大西 郁夫 教授

ONISHI Ikuo

研究内容

19世紀のロシア・リアリズム文学について、特にその成立の研究。具体的対象は当時の主要作家の一人I.A.ゴンチャロフとその作品。



▲07年にシンポジウムの途中立ち寄ったモスクワの赤の広場。



▲カラフルな装飾が美しい聖ワシーリイ寺院。

主人公の一日に100ページ！
知られざる文豪ゴンチャロフ

19世紀はロシア文学の黄金時代。ドストエフスキーやチエーホフなどの名だたる文豪たちの中に、日本ではそれほど著名ではないゴンチャロフがいます。代表作『オブローモフ』は徹底した人物描写で知られ、全400ページのうち主人公の一日を描くために100ページが費やされています。

当時のロシアは科学を基盤とする近代社会への転換期。自然科学の根本にある“観察の視点”が文学にも入り込み、社会と個人のあり方を延々と考え続ける主人公の描写に影響を及ぼしているとも考えられます。政治、経済、文化的にも閉塞感を持っていたロシア国民が惹き込まれてページをめくった「主人公の小さな世界」。現代日本の若いみなさんの心にもきゅんと響くであろうゴンチャロフ作品の奥深さがもっと知られていけばと願っています。

自己イメージが揺れる国ロシア
北国同士、文学の舞台を共有

ロシアという国は自分たちがヨーロッパであるのか、あるいはアジアなのか、絶えず身の置き所に揺れる国。アジアに位置しながら欧米化が進む日本と重なる点も多く、中でも同じ北国である北海道は雪景色や白樺が登場するロシア文学の舞台を共有しやすいという研究に適した環境に恵まれています。

小説を読むということは、作者が描く世界と人間の関係を体験し自分と世界の間を見直すこと。そこで共感する人物やツボを見出し、あなたならではのオリジナルの解釈をじっくりと膨らませていってほしいですね。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

大西 郁夫 教授 ONISHI Ikuo

■研究分野
ロシア文学

竹内 康浩 教授 TAKEUCHI Yasuhiro

■研究分野
アメリカ文学

瀬名波 栄潤 教授 SENAHA Eijun

■研究分野
英米文学、英語圏文学、ジェンダー・セクシュアリティ研究

戸田 聡 准教授 TODA Satoshi

■研究分野
古典文献学、古代キリスト教史

竹内 修一 教授 TAKEUCHI Shuichi

■研究分野
フランス現代文学

宮下 弥生 助教 MIYASHITA Yayoi

■研究分野
Shakespeare劇、物語理論、中世英語文学

表現文化論講座

日本古典文化論研究室

日本古典文化論研究室は、世界に冠たるわが国の文化遺産、すなわち、日本古典文学・日本古典文化に関する学問を行う研究室です。『古事記』・『万葉集』に代表される上代から、近松・西鶴・芭蕉等が人気の近世まで、各自の好みに合致した研究を万全の体制でサポートします。

Lab.letters 教員からのメッセージ

野本 東生 准教授

NOMOTO Tosei

研究内容

中世に成立した説話集について、その表現性を追求すること、あるいはその機構を解明すること。



▲文献調査は、活字文献の用例調査と解釈・注釈が基本。近年は図書館の公開画像や検索エンジンの充実でインターネット情報の活用基盤も整理されてきている。



▲休暇中には、実地調査をかねて名所旧跡や歌枕を訪れることもある。写真は鳥取県の三朝（みささ）山（野本准教授撮影）。

伝言ゲームで現在に至る説話集
書き手と読み手の関係性に着目

13世紀前半に成立した『十訓抄』や『宇治拾遺物語』は、短い話である説話が集まった説話集です。説話は物語とは異なり、比較的短い単体の情報であり、まるで伝言ゲームのように幾人もの手から手へと受け渡されて後世に伝わっていったという大変ユニークな特徴を持っています。ということは、「元は読み手だった書き手が、次の読み手にどういう切り口で情報を伝えようとしているのか」、書き手と読み手双方の関係を推し量りながら作品を解釈していくという面白みが、説話集研究には詰まっています。例えば、『十訓抄』のように一話ごとの教訓と説話集全体としての教訓に二重性を感じさせるものもあり、「なぜそう読ませるのか」書き手の真意を考えながら作品解釈を進めています。

身近な題材が多い説話集研究
情報を多面的に解釈する訓練にも

古典や古文というと、日常とは切り離された神棚に供えられたようなものに思われがちですが、それを神棚から下ろしてきて普通の日常会話のように取り扱えないか、というのが私の研究の軸になっています。とりわけ説話集は誰が読んでも身近に感じられる題材が多く、まだ手あかのついていないテーマが細部に眠っている可能性を秘めています。また説話集研究そのものが、ひとつの情報に対して多方面から物事を考える訓練にもなると思います。

大学で研究を進めるにあたっては、「知りたい」「気になる」などの関心を持つことが一番の原動力になります。皆さんの内に芽生えた関心の種が健やかに成長していけるように、私なりに精一杯手助けしていきたいです。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

表現文化論講座

中国文化論研究室

中国文化論研究室では、中国の思想、言語、文学などをはじめ、中国および漢字文化圏に関する幅広いテーマを学習・研究することができます。多くの学生は、中国・台湾への短期・長期の留学を体験しています。また本研究室には、中国からの留学生も多く、相互に生の異文化に触れあい、学びあうことができます。

Lab.letters 教員からのメッセージ

近藤 浩之 教授

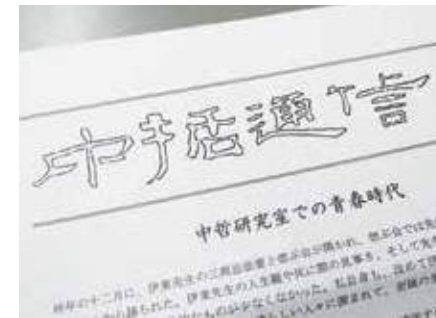
KONDO Hiroyuki

研究内容

中国湖南省長沙より出土した馬王堆漢墓帛書を中心として、出土資料に基づいて、中国古代の思想を研究している。



▲ついに完成した訳本「易学哲学史」全四巻。



▲OBも楽しみにしている会報誌「中哲通信」

師の遺志を受け継ぎ、足かけ8年
学びの絆で易学の大著を完成

日本では「占い」でおなじみの「易」ですが、中国では宇宙観や思想・学問すべての原理として最上位に置かれる経典です。そして北大の易学研究といえば、国内随一とも呼べる実績が自慢。平成21年春に、易学研究の大家・朱伯崑先生が記した『易学哲学史』の訳注（全四巻・総2068ページ）を出版しました。この一大事業の大黒柱であられた伊東倫厚先生が亡き後も、私を含む総勢37名がその遺志を受け継ぎ、足かけ8年の歳月をかけて完成させることができました。

研究者同士が手をたずさえて大志に挑む、北大ならではの“学びの絆”が生んだ大著だと、関係者全員が誇りに思っています。

そこまでするのか、蘇秦の謀略
漢文から立ち上る新たな人間像

軽い気持ちで授業の題材に選んだ縦横家（外交交渉のプロ、また今という国際スパイ）の一人、蘇秦には驚かされました。『戦国縦横家書』に記されている彼の行動には謎が多く、人間関係や地理・起きた出来事の順序などを整理していくと、驚くべき人間像が立ち上がってきたのです。知略・謀略を尽くした嘘八百の中になった一つ、蘇秦が貫き通した真実が浮かび上がってきたときには、全身が震える感動を味わいました。

こうした探究心の源は「好きであること」の一言に集約されます。一文字もおろそかにできない漢文資料から新たな人間像を結ぶ感動のダイナミズムをあなたと一緒に体験しませんか。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

金沢 英之 教授 KANAZAWA Hideyuki

■研究分野
上代文学

野本 東生 准教授 NOMOTO Tosei

■研究分野
中世説話文学

後藤 康文 教授 GOTO Yasufumi

■研究分野
平安時代物語文学

富田 康之 教授 TOMITA Yasuyuki

■研究分野
近世演劇

教員紹介

近藤 浩之 教授 KONDO Hiroyuki

■研究分野
中国古代思想、易学思想史

田村 容子 准教授 TAMURA Yoko

■研究分野
中国演劇、中国文学

武田 雅哉 教授 TAKEDA Masaya

■研究分野
中国文化、文学、芸術

弐 和順 教授 YUHAZU Kazuyori

■研究分野
中国古代学術思想

表現文化論講座

映像・現代文化論研究室

映像・現代文化論研究室では、日本の近代・現代の文学全般、日本および世界の映画を中心として、広く現代の表象文化（アニメーション映画・マンガ・写真・サブカルチャーを含む）と思想を理論的・具体的に考究します。文学・映像・思想のいずれについても、現在の理論水準を追究し、現代世界に通用する最先端の研究を目指します。

Lab.letters 教員からのメッセージ

小川 佐和子 准教授

OGAWA Sawako

研究内容

映画史研究。映画は隣接する芸術・大衆娯楽とどのような関係を切り結んできたのかという問題意識を軸に、ドイツ、ロシア、フランス、イタリア、北欧の無声映画を主な研究対象とする。現在は、オペレッタやカバレット、新派映画の研究をつうじて、パロディとメロドラマの領域に関心を持っている。



▲復元された映画を上映する「ポローニャ復元映画祭」の上映風景。イタリアの無声映画「サタン狂想曲」(1915-17)が当時と同じオーケストラ伴奏付きでお披露目上映された。各国のフィルム・アーカイヴで発掘・復元された「最新の無声映画」は、映画史を常に書き換えていくため、修士の頃から毎年通い続けている。上映は朝から夜中まで続く。



▲オペレッタにおける諷刺研究にも力を入れている。画像はイギリス生まれのオペレッタ「ミカド」(1885年)のベルリン大劇場におけるドイツ語翻案版上演プログラム(1927年、オーストリア国立演劇博物館所蔵)。当時、オペレッタと映画の作り手や観客層は重なっていた。

隣接分野も見つめながら 裾野に広がる芸術作品に関心

多種多彩な芸術研究の中でも私が特に心惹かれるのは、各分野を代表するような、価値の確立された研究領域よりも、市井の人々をも巻き込んだ裾野に広がる未踏の作品群です。博士論文で取り上げた1910年代の無声映画は、映画という芸術ジャンルが形成されていく過渡期に産声を上げました。演劇や美術、文学、大衆芸能といった隣接芸術・娯楽の要素を取り入れながら有機的に発展していく映画の“胎動”の過程を自著にまとめています。

学部時代は美術史専攻でしたが、フィルムの動きに魅せられて映画史研究に身を置くと、この領域がまだまだ新規開拓の余地があることが見えてきました。私のように隣り合う分野との関係にも関心を持つ人間には、非常に取り組みがいのある研究領域だと実感しています。

地に足をつけた研究活動と 「好き」を言語化する喜び

映画館や劇場が密集する首都圏と比較すると、鑑賞の機会が限られる北海道ですが、北海道大学は映画研究を専門にされている先生が多く、また自分から動き出せば、新しい作品や資料、研究に刺激を与えてくれる人々との出会いを得ることができます。自分の居場所にひきこもることなく、どっぴん外へ飛び出して、そしてできることなら大きなスクリーンや生のステージで劇場空間ごと作品を鑑賞してほしいと思います。

皆さんが作品に注ぐ愛情を自分なりの表現で言語化できた瞬間が、「好きなこと」を研究にする醍醐味です。学会発表や論文執筆など地に足をつけた活動のかたわら、「好き」を追いかける没入感を満喫する。この二つが皆さんの今後を支える大切な両輪になるのではないかと感じています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

言語科学講座

言語科学研究室

言語科学研究室では、言語の構造と運用に関して一般言語学と個別言語記述の立場から理論的、実証的、応用的な研究を行います。英語、ドイツ語・ゲルマン語、フランス語・ロマンス語、ロシア語・スラヴ語、朝鮮語、アイヌ語、日本語(国語学・日本語学)を中心に、関連領域を含む多様な言語研究を高度に展開するための指導体制を整えています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

野村 益寛 教授

NOMURA Masuhiro

研究内容

主な研究内容は、日英語を対象とした文法・比喩研究。言語は人間の心が生み出したものなので、言語を研究することは人間の心の働きについて知ることでもあるという立場から語や文が表す意味について考えている。



▲古今の英単語および引用文を網羅するオックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー。写真は野村教授がアメリカで買求めたコンパクト版。「肉眼」では読めず、拡大鏡が必須。



▲学びの集大成である博士論文は、写真のように立派なハードカバーの装丁をほどこした上で提出され、大学に所蔵されて閲覧に供される。

裸眼と肉眼の違いって何だろう 言語から見る世界の切り取り方

日本語の「裸眼」と「肉眼」、皆さんは日頃何気なく使っている両者の使い分けを説明できますか。どちらも道具を使わずに物を見ることを指していますが、「裸眼」は眼鏡やコンタクトを、「肉眼」は望遠鏡や顕微鏡を使わずに見る状況で使用します。英語にはこれに対応する区別はなく、ともに the naked eyeと表現されます。

私たち人間は、言語でこの世界を認識する生き物です。同じ人間の中でも上記の例のように言語によって世界の切り取り方が異なり、それぞれの世界観を構築しています。私の学生たちは英語と日本語の比較や特定の英語の文法事項を「なぜ?」の視点で問い直し、言語と世界の新たなつながりを明らかにしています。

星座をかたどる線のように 見えなかった知を明らかに

言語は“暗黙知”と言われ、呼吸や歩行のように意識せずともできてしまうものの一つです。頭の中に入っている言語データを取り出し、分析することで暗黙のうちに使っていた仕組みをクリアに明文化する。星と星の間をつなぐ星座の線のように、これまで見えなかったものが見えてくる瞬間こそが学問の醍醐味と言えるでしょう。学生には「文献を正確に読むこと」に力を入れて指導しています。何がわかり、何がわかっていないのかを知ることが研究の出発点。読み方の指導で基本的なテクニックを身につけ、さらに自分なりの読み方をつかむと研究にもいっそう弾みがつきます。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

阿部 嘉昭 教授 ABE Casio

■研究分野
映画・サブカルチャー研究、詩歌論

中村 三春 教授 NAKAMURA Miharuru

■研究分野
日本近代文学、比較文学、表象文化論

応 雄 教授 YING Xiong

■研究分野
映像表象論

水溜 真由美 教授 MIZUTAMARI Mayumi

■研究分野
日本近現代思想史、ジェンダー研究

押野 武志 教授 OSHINO Takeshi

■研究分野
日本近代文学、表象文化論

小川 佐和子 准教授 OGAWA Sawako

■研究分野
映画史、音楽劇研究

教員紹介

加藤 重広 教授 KATO Shigehiro

■研究分野
言語学、日本語学、語用論

野村 益寛 教授 NOMURA Masuhiro

■研究分野
英語学、認知言語学、意味論

菅井 健太 准教授 SUGAI Kenta

■研究分野
ロシア語学、スラヴ語学

佐藤 知己 教授 SATO Tomomi

■研究分野
言語学、アイヌ語、北方言語

藤田 健 教授 FUJITA Takeshi

■研究分野
フランス語学、ロマンス語学、統語論

藤本 純子 助教 FUJIMOTO Junko

■研究分野
ドイツ語教授法、異文化コミュニケーション

清水 誠 教授 SHIMIZU Makoto

■研究分野
ドイツ語学、ゲルマン語学

李 連珠 准教授 LEE Yeonju

■研究分野
韓国語学、言語学、日本語学、音声学

スラブ・ユーラシア学講座

スラブ・ユーラシア学研究室

スラブ・ユーラシア学研究室は、ロシア・中央ユーラシア・東欧のさまざまな地域を総合的に研究する地域研究を学ぶ研究室です。研究対象地域の言語と、多彩な分野の専門知識・方法を身につけ、他地域との比較も視野に入れながら、先端的な研究を行うことができます。現地調査や国際学会での報告も奨励・支援しています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

野町 素己 教授

NOMACHI Motoki

研究内容

1. スラブ諸語の類型的な文法研究
2. 言語接触の諸問題（特にバルカン半島の言語状況、また南スラブ諸語の標準語成立の過程など）
3. 少数話者言語とアイデンティティ



▲カシュブ語の母語話者である4姉妹、その姪（左端）と。「姉妹でも世代によって言葉の感覚に微妙な違いがあるところが面白いですね」と野町教授。



▲2018年冬期国際シンポジウム「帝国・ブロック・連邦にそびえる言語 1918-2018」の参加者。言語学者に加え、言語を研究対象とする歴史学、政治学、社会学などの専門家がそれぞれの視点から積極的に議論しました。

言語の接触から生まれる
多様な言語構造の変化に着目

「文化のモザイク」と呼ばれる東南ヨーロッパでは政治や社会の変動にともない様々な言語が接触し、多様な言語構造の変化を繰り返してきました。例えば、セルビア語は方言差が大きく、同じ国内でも時に違う言語と思われるような違いが見られます。では、なぜこういうことが起きたのか、タイプの違う言語構造が共存するまでの歴史的な背景や変化の道のりを解明していきます。

今最も注目している言語は、長年ポーランド語の方言として扱われてきたカシュブ語です。近年ではポーランド語とカシュブ語が併記されている街頭表示も出てきました。現地の母語話者たちの協力を得て、貴重な言語データを採集しています。

数々の国際会議成功の実績と
優秀な人材でスラブ研究を推進

スラブ語研究は国際化が進んでいますが、北海道大学は重要な役割を果たしています。2011年には世界15カ国からスラブ諸語文法研究のトップ研究者たちが集う国際会議を開催しました。2013年にはスラブ諸語を地域言語学と言語類型論から再検討する国際会議、2015年にはスラブ世界の少数話者言語と標準語形成、続く2016年は標準語イデオロギーを論じる国際会議、2018年には東欧の社会と言語変化の相関を論じる学際的国際会議を組織しました。世界でも注目される国際会議を成功させた実績と優秀なスタッフを配する環境は、北海道大学のスラブ研究の大きな強みです。

本講座は人文社会学の様々な分野の専門家との交流が日常的で、知的刺激に満ちています。スラブ語研究を志す方は、地域から言葉を眺め、一分野や一言語にとらわれない複眼的な視野を養っていきましょう。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

岩下 明裕 教授 IWASHITA Akihiro

■研究分野
ロシア・CIS外交、境界研究

宇山 智彦 教授 UYAMA Tomohiko

■研究分野
中央アジア近代史・現代政治、比較帝国史

ウルフ デイビッド 教授 WOLFF David

■研究分野
ロシア史、冷戦史

仙石 学 教授 SENGOKU Manabu

■研究分野
中東欧比較政治、政治経済学、福祉政治

田畑 伸一郎 教授 TABATA Shinichiro

■研究分野
スラブ・ユーラシア経済、比較経済体制論、北極域研究

長縄 宣博 教授 NAGANAWA Norihiro

■研究分野
旧ソ連地域のイスラーム、ロシア近現代史

野町 素己 教授 NOMACHI Motoki

■研究分野
言語学、スラブ言語学

安達 大輔 准教授 ADACHI Daisuke

■研究分野
文学、表象・身体・メディア、ロシアの言語文化

アイヌ・先住民学講座

アイヌ・先住民学研究室

アイヌ・先住民学研究室では、文化資源、生活環境、経済社会開発など、先住民族を取り巻く様々な課題の研究を行います。歴史学・言語学・文化人類学・博物館学・法学・考古学の視点からアイヌ・先住民学を体系的に学ぶための指導体制を整えています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

蓑島 栄紀 准教授

MINOSHIMA Hideki

研究内容

前近代（とくに古代・中世）のアイヌ史および北東アジア諸民族の歴史。東アジア・東部ユーラシアとの交流を通してみた日本古代史、とくに北方史。「先住民族史」としてのアイヌ史の構想へ向けた取り組み。



▲考古学の調査現場にも積極的に足を運び、多くを学ぶ。画像は2007年に厚真町で発見された15世紀の丸木舟保存作業。



▲画像上は奄美大島、赤木名の「グスク」（城、砦、聖域）の壕。画像下の厚真町桜丘で見つかったアイヌの「チャシ」の壕と比較すると、歴史や文化の共通性と独自性が見えてくる。

歴史の正しさに一石を投じる
当事者目線のアイヌ史を

私の研究の基盤は、文献史料にもとづく古代史研究です。研究フィールドである日本列島の南縁（奄美・沖縄）と北縁（東北・北海道）が倭国・日本や東アジア諸地域とどのような交流を持っていたかを、考古学などの隣接分野にも学びつつ追究し、北海道産のワシ羽や毛皮類などの交易品から人々の足跡を読み取ってきました。

近年は、アイヌ史を研究の新たな柱としています。一般に日本史では、本州が鎌倉時代に突入した13世紀頃に、北海道で「アイヌ文化期」が始まったとされていますが、これではアイヌの歴史と文化の有する長期的な過程がみえないのではないかと懸念が拭えません。日本史の枠組みでアイヌを語るのではなく、もっと幅広い時空でアイヌを主人公にしたアイヌ史を構想したいと考えています。

最前線の研究環境で
基本的な研究手法を大切に

北海道大学アイヌ・先住民研究センターは文字通り、アイヌと先住民研究のさまざまな分野の専門家が集まる刺激的な空間であり、当事者であるアイヌ民族・先住民族のスタッフと、和人・民族的マジョリティのスタッフとが協同して、異分野間の情報交換が活発です。また、当事者の意見や思いに接したり、当事者が直面している問題を目の当たりにする機会も多く、歴史が現在と地続きのものであると再認識することができます。

こうした学際的な環境だからこそ、皆さんには自分の中で基盤となる基本的な研究手法——文献や史料の森に分け入り、試行錯誤しながら事実に基づいて自説を「実証」する——をしっかりと身につけてほしいと思います。研究で壁に突き当たった時も、多くの場合、基本に立ち返ることが乗り越えるヒントを見つける近道になります。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

加藤 博文 教授 KATO Hirofumi

■研究分野
先住民考古学、先住民文化遺産、シベリア人類史

落合 研一 准教授 OCHIAI Ken-ichi

■研究分野
先住民法学、憲法学

北原 次郎太 准教授 KITAHARA Jirota

■研究分野
アイヌ宗教文化、アイヌ語、口承文芸

丹菊 逸治 准教授 TANGIKU Itsuji

■研究分野
口承文芸論、アイヌ語、ニヴフ語

蓑島 栄紀 准教授 MINOSHIMA Hideki

■研究分野
アイヌ史、北東アジア民族史、日本古代史

山崎 幸治 准教授 YAMASAKI Koji

■研究分野
アイヌ物質文化、文化人類学、博物館学

近藤 祉秋 助教 KONDO Shiaki

■研究分野
アラスカ先住民学、宗教人類学、狩猟研究



ありのままの姿を受け止め 多様性の中の私を問う

文化人類学研究室 修士課程2年

酒井 マナ SAKAI Mana

文化人類学の中でも
エスノグラフィーを専門とする酒井さん。
各地に足を運んだインタビューで
日本に暮らすイスラエル人の多様性に迫ります。

杉原千畝を出発点に
日本居住のイスラエル人を研究

小さい頃に読んだ本でユダヤ人に「命のヴィザ」を発行した外交官、杉原千畝のことを知り、ユダヤ人や中東について関心を持つようになりました。将来は教師になりたいという夢もあり、ユダヤ人研究と教員免許取得の両立ができる北大文学部へ。交換留学でアメリカに行ったときに授業で「ディアスポラ」(イスラエル以外の地に移り住んだユダヤ人)の存在を知り、「日本に住んでいるイスラエル人について知りたい」という自分の研究テーマが固まりました。日本がフィールドなので欧米の先行研究はなく、手つかずのテーマを見つけられたことも嬉しかったです。

学部3年まで東洋史学の研究室にいましたが、留学後エスノグラフィーの第一人者である小田博志先生に相談して、文化人類学研究室に移籍しています。

五感を使うインタビューで
多様な姿を受け止める

研究手法は、英語もしくは日本語のインタビューです。大きなテーマは「ルーツと多様性」。3、4代前にまで遡ったファミリーヒストリーや日本での暮らしぶりをうかがっています。小田先生から「エスノグラフィーは五感を使う」と教わり、ご当地料理をいただくのはもちろん、歌と一緒に歌ったり、家族の写真を見せていただいて、日本でたくましく生きている彼らの多様な姿をそのまま受け止めるように心がけています。それと同時に教育や平和など、今まで自分が日本で当たり前のように享受している様々な事柄についても、あらためて考えるようになりました。

将来の教職ではインタビューで培った聞く力を土台に、異文化理解において重要な役割を果たす「言葉の大切さ」を伝えていけたらと考えています。

PROFILE

1995年アメリカで生まれ、3歳のとき日本に帰国。
北海道大学文学部卒業後、大学院に進学。
2019年3月に高等学校教諭一種免許状(英語)を取得。
2018年10月に教員採用試験に合格し、
2020年4月から高等学校教諭として着任。



「アメリカ留学したときにディスカッションの熱さに驚きましたが、大学院も同じ雰囲気。授業を受ける姿勢もより積極的になり、今は教わることを全てが楽しいです。」

ここをチェック!

入試対策 先行研究と照らし合わせて独自性をアピール

Q. 北大文学部出身の酒井さんは特別入試枠で入りましたが、どのような準備をしましたか?

A. 先に特別入試で入った友達だったので、彼女の研究計画を見せてもらいながらいろいろアドバイスをもらいました。ポイントは同じ分野の先行研究をどれだけ知っているか。私のように日本在住のイスラエル人研究をしている先例は見つかりませんでしたが、「自分は何を明らかにしようとしているのか」という独自性を際立たせるためにも、出来る限り周辺の先行研究を調べることが重要です。研究計画を書くことと自分の方向性が可視化できて、気持ちの整理にもつながります。そのモチベーションを胸に面接では自分の熱意を精一杯アピールしました。



なんと酒井さんの妹さんも小田研究室所属! エスノグラファー姉妹なのだ。

研究を通して「聞く姿勢」が身につきました。

エスノグラファーの役割は異文化同士のかけ橋になること。

Weekly Schedule 修士課程1年:2学期の場合

「専門分野以外のこともたくさん学びたい」と学部の授業も受講。
フィールドワークをする同期生と不定期に自主ゼミを開くことも。

MON	塾講師のアルバイト	
TUE	10:30~ 大学院授業「宗教学特殊講義」 13:00~ 大学院授業「文化人類学特別演習」 14:30~ 4、5時限と続けて「文化人類学フォーラム」	文化人類学に関わる学内の研究者が横断的に集う場です。先に先生方が発表し、5時限目は私たち学生の番。いろいろな意見をうかがえるのが勉強になります。
WED	13:00~ 学部生対象授業「文化人類学概論」TA 14:30~ 学部授業「応用社会学」 18:00~ 自主夜間中学「遠友塾」でボランティア	ディアスポラがテーマなので学部生と一緒に受講しています。 私の母校である札幌向陵中学校でおじいちゃんおばあちゃんが国数英社を学ぶお手伝いをしています。クラスの最高齢は94歳。こちらが元気をいただきます。
THU	10:30~ 学部授業「文化人類学演習」 塾講師のアルバイト	
FRI	16:30~ 教職授業	
SAT	塾講師のアルバイト	
SUN	相手の都合にあわせてオンライン・インタビューをすることも	ユダヤ教の新年祭「ロシュハシャナー」。民族の歴史を忘れないようにそれぞれの食べ物に意味が込められている。

Annual Research Plan 年間計画 修士課程1年の場合

4月	海外の文献集め	
5月		
6月	フィールドワークの計画準備(飛行機や新幹線、宿泊先を手配)	
7月		
8月		
9月	夏休み中にインタビューを実施(取材先は東京、大阪、愛知など)	
10月	一度につき2~3時間のインタビューを書きおこし、共通点や独自性を分析	
11月		フィールドワークでいただいたユダヤ教のお守りは必ず携帯。
12月	先行研究と照らし合わせながら、まとめ作業	
1月	発表	
2月	フィールドワークの計画準備(飛行機や新幹線、宿泊先を手配)	
3月	春休み中にインタビューを実施(取材先は神戸)	

日本在住のイスラエル人が作っているFacebookグループに加入して、インタビュー協力者を募る。「北海道からわざわざ話を聞きに来てくれた」と酒井さんを歓迎し、次の協力者を紹介してくれる人も少なくない。アルバイト代はほぼ全て移動・宿泊費に消えていくが、「お金には替えられない貴重なお話を聞かせていただけるので本当にありがたいです」と酒井さん。喜ばれている手土産は北海道大学認定の「札幌農学校」クッキーだ。

※本項は2019年5月現在のデータで構成しています。

Division of Human Sciences

人間科学専攻

国際的な人間科学研究をさらに高めへ

実績

グローバルCOEなど大型研究プロジェクトを牽引した世界レベルの研究実績が揺るがぬ土台に。

人間と社会に関する
総合的な学びに
科学的にアプローチ。

実験、実習、フィールドワーク等、多彩な研究手法でアプローチ

■ 主な講義題目

心理学研究室	■ 心理学研究のフロンティア ■ 認知行動科学の問題と方法 ■ 感覚・知覚研究 ■ 認知神経科学の問題と方法 ■ 音楽心理学の問題と方法
行動科学研究室	■ 現代社会心理学の動向 ■ 進化認知科学の最前線 ■ 環境社会心理学 ■ 行動科学における実験調査分析 ■ 数理モデルの理論と方法 ■ 集団力学の理論
社会学研究室	■ 計量的分析の基礎と応用 ■ 社会学の理論と実証 ■ 東アジアの近現代化と政教関係・教団発展の経路 ■ 東アジアにおける社会変動
地域科学研究室	■ 環境と地域の社会学的研究 ■ ポリティカル・エコロジー論 ■ 生物多様性保全論 ■ 地理学と地理空間情報 ■ 経済地理学研究 ■ 観光地域論

■ 修士・博士研究テーマ例

心理学研究室	○ 修士 「晴眼者の反響定位による距離推定のバイアス」、 「感覚運動野におけるミラーニューロンシステムの神経基盤の検討」 ● 博士 「Effects of Prenatal and Postnatal Ethanol Exposure on the Development of Ultrasonic Communication and Sociality in Rats」
行動科学研究室	○ 修士 「ヒトとウマにおける行動同期 - 歩行場面に着目した探索的検討 -」、 「集団を越えた相互協力の達成に関する実験的検討」 ● 博士 「累積的文化進化における文化アトラクターの影響: 実験室実験を通じた網羅的検討」
社会学研究室	○ 修士 「双生児と非双生児の教育達成 - 行動遺伝学と社会学からのアプローチ -」、 「越境する中国民間信仰と日本華僑社会 - 神戸華僑と関帝廟・普度勝会を中心に -」 ● 博士 「少子高齢化社会における日韓比較 - 子育て支援、高齢者扶養・介護を中心に -」
地域科学研究室	○ 修士 「カリマンタン島におけるセンザンコウ・ヤマアラシ保全に向けた課題: 先住民族による狼の意味づけと重要性に着目して」、 「日本の農村における小規模ワイナリーの展開 - 北海道余市町と長野県東御市を事例として -」 ● 博士 「The Political Ecology of Salt: Dynamics of Agrarian Change in Rural Kupang, Indonesia」

心理学講座

人や動物の認知活動は如何に行われ、脳はどのように働いているのか？
当講座では、このような認知心理学の問題をテーマとした教育・研究を行っています。具体的には、知覚、注意、記憶、学習、発達など、長い歴史を持つ分野における心的過程の解明のみならず、脳科学、音楽、魅力など、比較的新しい学際的な分野における現象やそのメカニズムについての理解を進めたり、産業応用にも取り組んだりしています。全教員が連携を取りながら、専門家・研究者の育成を行っています。



●心理学研究室

行動科学講座

社会心理学・進化心理学・文化心理学・行動経済学・神経科学・比較認知科学など人間・社会科学諸領域で生み出された理論と方法を融合させ、「心と社会のマイクロ・マクロ関係」、すなわち人や動物の心とそれを取り巻く社会との相互影響過程に関する先導的研究を進めています。協力行動の適応的・神経科学的基盤、文化の生成と伝達、社会的意思決定、社会構造と心理の関連といった理論研究から、社会問題の解決や公共的意思決定といった実社会対応型まで、幅広い研究を行っています。



●行動科学研究室

社会学講座

社会がどのような構造をもとにどう変化しているかを個人との関係から記述し因果的に説明すること、どのような社会を目指すべきかを規範的に構想すること、これらの基礎となるデータを社会調査によって正確に収集し分析できること、を目指しています。そのため大学院生は、各自の関心を中心としながら、社会学の古典的な理論から最新の仮説まで、質的・量的な社会調査法とともに幅広くそして深く学びます。海外の大学への留学を支援するとともに、必要に応じて専門社会調査士資格を取得できる体制を整えています。



●社会学研究室

地域科学講座

地域科学講座では、現代社会が抱える多様な問題について、人間社会と自然環境の両面から総合的に研究を進めています。地域社会学・人文地理学・社会生態学という分野を基軸として、「地域の視点」に立った現場での調査を実施し、互いに議論を交わすなかで、「地域」の理解と考察を深めます。各分野の基礎的理論からフィールドワークの技法、分析法、実社会への応用までを、野外実習を交えながらマン・ツー・マンで指導することで、自分で問題を発見し、自分で調べ、解決策を探るといった社会で必要とされる能力の養成を目指しています。



●地域科学研究室

心理学講座

心理学研究室

心理学研究室では、知覚、注意、記憶、学習、発達、脳科学、音楽、魅力などに関するオリジナルな実証研究を各学生が計画・遂行し、その成果を論文として発表できるような研究者や、その過程で身につけた技能を職場で生かせるような人材を育成するための指導体制を整えています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

安達 真由美 教授

ADACHI Mayumi

研究内容

音楽における特定の感情や表現がどのようにして演奏者から聴取者に伝わるのか。初見奏に関わる認知メカニズムの解明。家庭内外における経験が子どもの発達に与える影響の解明。旋律に対する期待の発達や文化差等。



▲初心者の初見視奏時の左右それぞれの目の位置(+、0)とその時に実際演奏している音のタイミング(赤い線)から「視手範囲(どれだけ先を見ているか)」を測定することで、楽譜情報がどれだけ効率的に指の動きに伝わっているかを検討することができる。



▲12ヵ月半の赤ちゃんが家で一人あそびしている際に、初めて聴いた音楽にもノリノリに動いているところ。生後5ヵ月以降には音楽が聴こえてくると自発的に身体を動かす(身体が動く)ようになることが分かっている。

乳幼児の音楽あそびから
芸術的演奏までを科学的に解明

私のラボで行なっている研究の二大キーワードは「音楽」と「発達」です。ここ数年は、「演奏者と聴取者間のコミュニケーション」や、初めて目にした楽譜を練習せずに演奏する「初見視奏」について研究してきました。また少し前には、子どもの発達における家庭の音楽環境や学校音楽教育の影響、あるいはそれらの関連性などについても取り扱ってきました。2009年から7年間共同研究者として参画した「歌に関する国際共同研究プロジェクトAIRS」では、子ども向けの歌唱能力テストの開発や、乳児の歌声の発達に関する研究に携わりました。このように、日常で見かける何気ない音楽現象から高度な技術を要する芸術としての音楽まで、幅広い視点で音楽を科学的に研究しています。

日常生活の疑問からスタート
カナヅチを捨てる柔らか思考

すべての研究は、「日常生活で起きている音楽・発達上のどんな疑問点を明らかにしたいのか」というリサーチクエストを明確にすることから始まります。その疑問を解決するためには、自分が得意とする研究手法一辺倒になる「カナヅチ症候群」に陥ってはいけません。家を建てる際にカナヅチ以外の道具が必要であるのと同様に、直面している問題を見極め、最適な研究手法を選んで実行する力が必要です。その術を身につけることができれば、研究以外の場でも生かすことができます。また、皆さんが世界で活躍できるよう、週に一度の英語ランチや月に一度の英語ゼミも行っています。興味がある方はぜひご参加ください。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

安達 真由美 教授 ADACHI Mayumi

■研究分野
音楽心理学(聴取、演奏、感情、発達)

和田 博美 教授 WADA Hiromi

■研究分野
発達神経行動毒性学

川端 康弘 教授 KAWABATA Yasuhiro

■研究分野
認知心理学(色覚、感性、知識、熟達)

小川 健二 准教授 OGAWA Kenji

■研究分野
認知神経科学(特に運動学習や社会認知)

河原 純一郎 教授 KAWAHARA Jun-ichiro

■研究分野
認知行動科学(注意、記憶、魅力、ストレス、産業応用)

森本 琢 助教 MORIMOTO Taku

■研究分野
認知心理学(クロスモダルな情報処理過程、記憶、心的イメージ)

行動科学講座

行動科学研究室

行動科学研究室は、社会心理学・進化心理学・文化心理学・行動経済学・比較認知科学・神経科学など人間・社会科学諸領域の理論と方法を融合させ、人や動物の心と社会との相互影響過程に関する先導的研究に取り組みます。専門に特化した内容はもちろん、指導教員以外からも深く幅広く学べる教育体制を整えています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

結城 雅樹 教授

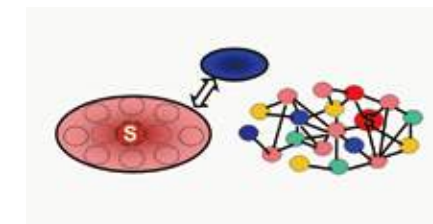
YUKI Masaki

研究内容

社会環境の性質と人間の心理・行動との関連、集団過程の性質の文化差。



▲(図1) 39カ国比較研究(Thomson, Yuki, et al., 2018)における関係流動性スコア(赤が強いほど関係流動性が高く、青が強いほど関係流動性が低い)



▲(図2) 北米人と東アジア人の集団行動原理の違い(Yuki, 2003)。「S」は自己(self)を表し、周囲の複数の小さな円は他の内集団メンバーを示す。左側の北米型では「ライバル校とどちが強い」などの外集団との比較が、右側の東アジア型では集団メンバー同士の関係性が重視される。

心の多様性はどこから生じる?
社会の性質の違いに注目した分析

異なる国、異なる地域、異なる学校や業種などの間で、そこに暮らしている人々の心のあり方がしばしば異なるのはなぜでしょうか。私の研究ラボでは、人の心の多様性が生まれる原因を、それぞれの社会の性質の違いに求める「社会生態心理学」に基づく先端的な研究を進めています。現在特に注目しているのが、関係流動性と呼ばれる社会的な要因の効果です。対人関係を自由に選べる欧米型の社会と、対人関係が固定的なアジア型の社会では、人々の心理はどのように異なってくるのでしょうか(図1)。また、当ラボがこれまでに発見した新たな心の多様性として、集団行動原理の文化差(図2)や、表情知覚の文化差(相手の目を見るか口を見るか)などがあります。

国際色豊かな顔ぶれとともに
刺激に満ちた共同研究

研究で国際比較を多用することもあり、私の研究室にはこれまでアメリカやニュージーランド、英国、中国、クオアチアを出身とする大学院生やポストドク研究者など、国際色豊かな顔ぶれが所属してきました。研究に対してはチームで取り組む共同研究のスタイルをとっており、そこから各自が関心を持つ切り口や方法論で自分の研究テーマを掘り下げていきます。

指導で重要視するのは、国際レベルで競争できる研究者を育てること。正確かつ簡潔に伝えるコミュニケーション能力の育成を大切にしています。行動科学研究室ではラボ間の垣根が低く、全ラボが一同に会する共同ゼミでは、教員同士の熱い議論も珍しくありません。研究の糧となる刺激に満ちた環境で皆さんを待っています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

大沼 進 教授 OHNUMA Susumu

■研究分野
環境社会心理学、リスクガバナンス

高橋 泰城 准教授 TAKAHASHI Taiki

■研究分野
行動科学、神経経済学

中島 晃 助教 NAKAJIMA Akira

■研究分野
応用統計学

高橋 伸幸 教授 TAKAHASHI Nobuyuki

■研究分野
社会心理学、実験社会科学

瀧本 彩加 准教授 TAKIMOTO Ayaka

■研究分野
比較認知科学

結城 雅樹 教授 YUKI Masaki

■研究分野
社会心理学、文化心理学、社会生態心理学

竹澤 正哲 准教授 TAKEZAWA Masanori

■研究分野
社会心理学、適応的意思決定、文化進化論

社会学講座

社会学研究室

社会学研究室に現在在籍する教員は、現代宗教・アジア地域社会・宗教とウェルビーイング・ソーシャル・キャピタルなどに着目した研究、社会的排除・福祉や医療・質的調査法に関する研究、社会階層・学歴・家族・労働市場などに着目した社会的不平等に関する研究を行っています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

樋口 麻里 准教授

HIGUCHI Mari

研究内容

1. 障がいや病をもつ人々およびその家族に対する社会的排除
2. 家族やジェンダーに関する社会意識
3. 質的調査法



▲フランスでは頻繁に各地でデモが行われ、市民が政治にはたらきかけることが広く浸透している。



▲各QDAソフトウェアの機能の特徴と、質的データの分析方法とを照らし合わせて考えることで、ソフトウェアを自分の研究スタイルに合わせて活用できる。
(図の出典:樋口麻里2017, 2018より一部加工)

社会的排除が映し出す理想の社会像に迫る

私はどのような社会であれば、病や障がいのある方、特に精神障がいのある方とその家族が、安心して生活できるのかを研究しています。日本の精神科入院期間は、諸外国と比べて非常に長いです。入院が長引くと、家族や友人、学校、職場、地域との関わりが途切れ、社会的排除という状況に陥りやすくなります。精神障がいのある方が安心して生活できる仕組みを作るには、人々がどのような社会を望ましいと思っているかという価値観と、精神障がいのある方に対する社会の処遇との関係を考えることが重要だと私は考えています。たとえば私が調査しているフランスでは、精神障がいのある大人を受け入れる里親制度があり、家族に頼れない人の一部を受け入れています。他国と比べることで、それぞれの社会の価値観の一端を明らかにすることに関心を抱いています。

分析プロセスを可視化するソフトウェアの活用

現在、社会学に限らず質的調査を行う研究者の間では、質的データの収集・管理・分析を効率化するQDAソフトウェアが浸透し始めています。それにとまって、データ分析のプロセスも可視化できるようになってきました。分析の途中で他者と意見交換することも容易になり、授業や共同研究の際にも非常に有効です。ただ、ソフトウェアの機能をフル活用するには、まず質的調査の方法への理解が必要です。質的調査法のスキルを身に付けたいという方はぜひ、当研究室のドアをノックしてください。研究テーマの発掘はどうぞ、皆さんが自分で「これだ!」と思うものを。

私同様道外から来た人は北海道で感じた驚きや新鮮な雰囲気やヒントに、自分らしい関心を育んでいってほしいと思います。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

櫻井 義秀 教授 SAKURAI Yoshihide

■研究分野
宗教・文化社会学、タイ地域研究、東アジア宗教研究、ウェルビーイング研究

伍 嘉誠 准教授 NG Ka Shing

■研究分野
ナショナリズム研究、社会運動論、宗教・文化社会学、東アジア研究

平澤 和司 教授 HIRASAWA Kazushi

■研究分野
社会学(特に教育、家族、社会階層)

樋口 麻里 准教授 HIGUCHI Mari

■研究分野
社会的排除論、福祉・医療社会学、家族社会学、国際比較

地域科学講座

地域科学研究室

地域科学研究室では、フィールドワークを主体として現代社会が抱える多様な地域問題について取り組みます。地域社会学・人文地理学・社会生態学という分野をベースとして、多面的・学際的な議論を交わすなかで社会や環境への理解と考察を深め、問題の解決を図ります。

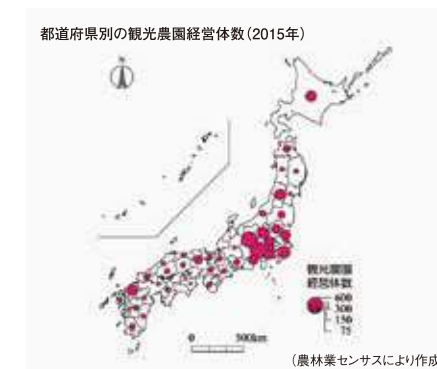
Lab.letters 教員からのメッセージ

林 琢也 准教授

HAYASHI Takuya

研究内容

- 人文地理学の視点から、大きく4つのテーマを中心にフィールドワークを重視した研究を進めている。
- ①日本における観光農業発展の地域システムに関する研究
 - ②都市における「農」の役割に関する研究
 - ③地域づくり・観光振興に関する実践研究
 - ④農業分野における知的財産権の保護・活用に関する研究



▲観光農園は、果樹栽培の盛んな地域や大都市の周辺地域に数多く展開している。現地を訪れ、聞き取りをおこなうと、各農園の経営戦略には、地域性や立地条件が影響している場合が多く、そこに地理学の貢献可能性を感じることができる。



▲ブドウやリンゴ、サクランボ、ブルーベリーなどを利用した観光農業に関する調査を研究の軸に据え、その他に岐阜県東海市と良町の地域づくりの実践活動にも積極的に携わっている。

人と地域の関わりを描く「観光」「農業」「農村」研究

人文地理学は人間と場所の関わりに着目する学問です。例えば、農村において都市住民や観光客が農産物を収穫できる観光農園は皆さんもよくご存知だと思いますが、実は東京都内でも10年以上前からブルーベリーの摘み取り園が増えています。市街化が進む中であって、都市住民と生産者や農地をつなぐ役割を観光農園が果たしているのです。地域の変化に及ぼす人間の影響は大きく、私はそうした現象のもつ意味や変化の要因などを関係者への聞き取りやアンケート調査をもとに分析・考察しています。

北海道は「観光」「農業」「農村」「食」「地域づくり」といった研究をおこなう上でフィールドの宝庫です。学内にも多彩な分野の先生方がおり、文学部はもとより、他学部の先生方も含め学際的な連携体制が構築できれば、北海道らしい雄大な視点から充実した研究を進めていくことができると思います。

文理融合の思考を鍛える総合科学としてのフィールドワーク

学生指導では、皆さんが卒業後の人生においても糧となるような学びを習得できるように心がけています。フィールドワークは協力してくださる方々がいて初めて成立するものです。調査での立ち居振る舞いや感謝の気持ちなど大切なことをおさなりにせず、1人の人間として成長して欲しいと願っています。

その地域で起きている現象を丹念に調査・分析し、理解するには文系系を問わず様々な分野の研究成果や理論などにも目を配ることが必要であり、そうした知見も含めた上で総合的に地域を捉えることが不可欠です。それは地理学が総合科学といわれるゆえんでもあります。学生時代にフィールドワークを経験することで文理融合の思考を身に付け、願うことならば、お世話になった地域への還元や応援の気持ちを長く持ち続けてくれたら嬉しいですね。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

池田 透 教授 IKEDA Tohru

■研究分野
保全生態学、侵入生態学(外来種管理)、野生動物管理学、ニュージーランド地域研究、社会生態学

笹岡 正俊 准教授 SASAOKA Masatoshi

■研究分野
環境社会学、ポリティカル・エコロジー論、インドネシア地域研究

立澤 史郎 助教 TATSUZAWA Shiro

■研究分野
保全生態学、環境教育論、シベリア地域研究

橋本 雄一 教授 HASHIMOTO Yuichi

■研究分野
都市地理学、地理情報科学(GIS)

仁平 尊明 准教授 NIHEI Takaaki

■研究分野
人文地理学、農業地理学、地誌学

宮内 泰介 教授 MIYAUCHI Taisuke

■研究分野
環境社会学、地域社会学、開発社会学

林 琢也 准教授 HAYASHI Takuya

■研究分野
経済地理学、観光地理学、農村地理学



プログラミングや共同研究 全てを経験に変えて快進撃

心理学研究室 博士後期課程3年

伊藤 資浩 ITO Motohiro

学部時代から慕う教員に導かれて
名古屋から北海道大学に来た伊藤さん。
「まずは手を動かす」行動力で
各学会から注目を集める若手のホープです。

活気あふれる研究室、企業との共同研究も

指導教員である河原純一郎先生が中京大学在籍時に、自分はその学部生。こちらのやる気に火をつけてくれるような授業が面白くて、北大に移籍した先生を追う形で北海道に来ました。2019年春時点で河原研究室は院生が7人。皆、河原先生のエネルギッシュな研究姿勢に惹かれて入ってきた仲間です。企業との共同研究も多く、僕も「衛生マスクの着用が印象にどのように影響するか」という研究に参加しました。自分の専門は基礎心理学研究ですが、こうした社会に直結する研究にも関わらせてもらえることが、いい刺激になっています。

初の一人暮らしで不安もありましたが、名古屋と札幌は街中に緑豊かな公園やテレビ塔があるところが似ていて親近感がわきましたし、なにより北大は札幌駅に近い立地が抜群。快適な学生生活を送っています。

注意や記憶の実験を充実の研究環境が後押し

自分の専門は、認知心理学の中でも適切な行動を導く心的機能である注意や記憶に関する研究です。実験プログラムを作成し、被験者に画面を見せて、多数の妨害刺激の中からこちらが指定する標的(色付き文字など)を回答してもらうといった実験をしています。時には脳活動を測定するMRIを使うこともあります。総合大学である北大は医歯学総合研究棟に装置があり、文学研究科の中にもfMRI研究に精通した先生も在籍しているために、非常に恵まれた研究環境で実験を進めることができます。

自分は現在研究室の中で学年が最年長ということもあり、自分の一歩が後輩の見本となるように努力しました。将来はアカデミック志望です。「全てが経験になる」と信じて、これからも精進していきたいです。

PROFILE

1992年愛知県名古屋市生まれ。中京大学心理学部卒業後、中京大学大学院心理学研究科で修士課程修了。北海道大学大学院文学研究科の特別研究学生を経て2017年から博士後期課程に進学、日本学術振興会特別研究員(DC1)に採用。



「心理学で実験プログラムを作成するという意外に思われるかもしれませんが、自分は楽しみながら取り組むことができました。ゲームを作っているような感覚です。」

ここをチェック!

入試対策 英語の論文と参考書を読み込む!

Q. 北大の特別研究学生を経て博士後期課程の入試を受けた伊藤さん。特に力を入れた試験対策は?

A. 一言で言うと英語の論文や参考書を読み込む、これに尽きるといいます。入試の筆記科目は英語のみなのでアメリカの大学院受験対策の教材「GRE Subject Test: Psychology」を読みながら、各所属教員のテーマに関連する論文をチェックしました。Writing対策は事前に研究計画を英語で書いてみるのがおすすめです。意外なのは口述試験で、その場で提示された心理学の専門用語を即座に解説する場面があること。大学院に入ったら研究に加えて教育の要素も意識することになるので、その力が試されたのかなと思います。参考書「マイヤーズ心理学」のキーワード解説を読み込み、簡潔に答えられるように対策しました。

Weekly Schedule (博士後期課程2年:2学期の場合)

自宅と大学は自転車を通える距離。朝から夜9~10時まで研究室。曜日を問わず実験、データ分析、論文執筆、学会準備に追われる。

MON	10:30~ 学部生対象科目「心理学実験演習」TF	
TUE	授業やTF・TAの仕事がないので研究に集中	注意や記憶に関する行動実験を行います。眼球運動の測定やMRIを使うこともあります。
WED		
THU	14:30~ 学部生対象科目「心理学演習」TA 16:30~ 修士課程対象科目「認知理論特別演習」	受講生にまざってプログラミングの勉強をしています。
FRI	10:30~ 研究室ゼミ	学部生・院生含め毎週1~2人が発表。意見交換・情報収集を行います。
SAT	朝は自分の時間、昼から大学へ	夜は映画を観に行ったり、研究室のメンバーと出かけたりすることもあります。
SUN		

今こうして北大で研究している自分は、いなかったら、学部生時に河原先生の授業を受けていなかったら、

Annual Research Plan 年間計画 (博士後期課程2年の場合)

4月	D1の3月に2017年度 SAGE-北大社会科学国際優秀論文賞を受賞、春先は前年度の成果報告や学会準備に集中	
5月	Vision Sciences Society (フロリダ) でポスター発表、認知心理学会 (大阪) でポスター発表	
6月	論文執筆、投稿	
7月	投稿論文の査読、『北海道心理学研究』に論文が採択	
8月	投稿論文の査読、海外ジャーナルに論文が採択	
9月	日本心理学会 (仙台) でポスター発表、この発表で学術大会優秀発表賞の受賞内定	
10月	北海道心理学会 (札幌) でポスター発表、奨励賞を受賞	2017年度日本基礎心理学会の「優秀発表賞」とあわせてダブル受賞
11月	研究論文II (博士論文の経過報告) を提出	
12月	日本基礎心理学会 (神奈川) でポスター発表、優秀発表賞を受賞	
1月	カナダのプリティッシュ・コロンビア大学で研究ミーティング	
2月	来年度に向けた準備期間、本年度の成果をまとめる	
3月	日本心理学会若手の会 (京都) でポスター発表、ゼミ旅行	毎年の恒例行事。昨年度は四国横断 (本人右端)

優れた発表で多数の賞を受賞している伊藤さん。常に何かの締切に追われているという。「以前は何か月も前から準備し、時間があるだけ何度も推敲等の作業を繰り返していました。今は締切から逆算して、適切な時間内で集中して仕上げるやり方。そのほうが自分には合っているようです」。多忙な毎日だが金曜の夜は飲みに行き、オフタイムも楽しんでいる。

※本項は2019年5月現在のデータで構成しています。

TOPICS
1

一人ひとりの学びを応援!

在学生のための情報とアーカイブが充実 〈ウェブサイト〉 www.let.hokudai.ac.jp/



文学研究院・文学院・文学部のウェブサイトでは、大学院生や大学院を志す皆さんに役立つ最新情報や、アーカイブを充実させています。セミナー、大学院進学説明会、支援情報などを活用して、研究発表や進路選択に役立ててください。



▲文学研究院・文学院・文学部公式Twitterは、研究情報、学内行事など学生向け情報を中心に更新、緊急時の情報共有メディアとしても利用します。

研究情報を中心に発信している公式Facebookもご覧ください。
<https://www.facebook.com/Hokudai.Humanities.HumanSciences/>

人と情報の交差点エントランスホール



教員著書のほか北大所蔵の美術作品の企画展示もおこなう「書香の森」

文学院・文学部のエントランスには、「書香の森」と名づけた書棚と展示棚を設置しています。各教員の研究の集大成とも言える著書を展示する他、企画展示や教員が自著を紹介する読書会も行います。興味のある本はすぐ近くの文学部図書室内で借りることができます。

常に机が確保できる院生研究室



研究室ごとに「院生研究室」を設置しており、ひとり一台の机で勉強できるよう十分な設備を整えています。なかには個人ロッカーや個人の本を置ける開放書棚がある部屋も。文学院内で腰を落ち着けて読書、思考、執筆ができると、院生に好評です。学生用PC室も新しくなりました。

国際交流室



文学院・文学部の国際交流に関する業務、留学生受入、在学留学生の支援などを行っています。また、交換留学に関する情報提供、大学院生・学部生の交換留学の申請手続き支援、協定校への仲介などを行っています。

ラフェイ ミシェル 准教授
LA FAY Michelle
■研究分野
日本におけるプロテスタントキリスト教、内村鑑三

研究推進室



大学院生の出張旅費支援・校閲費支援の窓口、申請書の書き方セミナー (p.07-p.08) 等各種セミナーの企画実施のほか、リサーチ・アシスタント (RA) のアウトリーチ支援、若手研究者支援情報の提供など、大学院生やポストドクのみなさんの研究活動をバックアップしています。

TOPICS
2

関連組織情報

文学研究院内センター



応用倫理・応用哲学研究教育センター

本センターの目的は、応用倫理、応用哲学、ジェンダー・セクシュアリティ、死生学に関する研究・教育を推進することにあります。2007年4月に「応用倫理研究教育センター」として設置され、応用倫理の研究教育に携わる、国立大学では初の常設機関として活動を開始しました。2008年度よりジェンダー・セクシュアリティに関わる研究教育も活動範囲に加え、2018年度より「応用倫理・応用哲学研究教育センター」へと改称し、新たに「応用哲学」と「死生学」を研究領域に加えることになりました。



北方研究教育センター

北方研究教育センターは、文学研究院が対象とする歴史、文化、言語、芸術、文学、考古、環境など広範な視点から「北方研究」を捉え、研究・教育を進めています。対象地域は、北海道やロシアをはじめ、北欧、北米、北極にも及び、さまざまな大学や研究機関との共同研究や交流の拠点となっています。また、雑誌『北方人文研究』の発刊、シンポジウムや研究会などの企画・運営を行っています。

学内共同施設



社会科学実験研究センター

社会科学実験研究センター (CERSS) は、先進的な社会科学実験を展開する日本唯一の専門機関であり、国内外の主要研究拠点と連携するハブとしての役割を担っています。心理学・認知科学・脳科学と、経済学、法学、政治学を含む社会科学諸分野との接合を図ると同時に、当該分野における若手人材の育成、研究成果の国内外への発信を行い、社会科学実験に関する研究・教育の発展に寄与しています。



人間知・脳・AI研究教育センター

人間知・脳・AI研究教育センターは、新しい「人間知」の創成という理念のもと、数千年来の知の伝統を受け継ぐ人文社会科学と、急速に進展しつつある脳科学 (神経科学)・人工知能 (AI) の知が高度なレベルで融合する文理融合型研究・教育を行うセンターです。脳科学 (神経科学) と AI 研究の急速な進展により、旧来人文社会科学が扱ってきた「人間」への問いが新たな仕方でも学際的に問われ始めています。本センターは、この挑戦に応え、文理の境界を超えた先端的研究のプラットフォームを作ることを目指します。国内外から最先端の研究者を招聘して行うサマースクール・ウィンタースクールを中心に、プログラムに所属する大学院生は刺激に満ちた共同研究に参画し、国内外の研究室・企業へのインターンシップを行うことができます。(2019年7月開設)

学生生活

札幌の中心部に緑のキャンパス

北海道大学は札幌の中心部という恵まれた立地にあり、緑豊かなキャンパスが広がっています。交通網の要であるJR札幌駅からも徒歩圏にあり、通学にも便利です。大学周辺は学生街として発展しています。大学の関連施設は、130年に及ぶ知の探求の歴史を伝える総合博物館や、市民の憩いの場としても親しまれている植物園、交流の場を創造するコンベンション施設やセミナーハウス、山小屋など。道外では東京オフィス、海外では韓国ソウルやフィンランドヘルシンキ、ザンビアルサカ、中国北京にオフィスが、またタイ、インドネシア、フィリピンにリエゾンオフィスがあり、出張や留学時の拠点として活用されています。



大学寮や保育施設も利用可能

北海道大学には男女学部生と男子大学院生用^{ひいてきりゅう}に恵迪寮、女子学部生と女子大学院生用^{まうせいりゅう}には霜星寮があります。他に札幌市内に公・私設寮が10カ所以上あり、北海道大学生協同組合では下宿・貸間・寮等の紹介も行っています。外国人留学生に対しては、6カ所の留学生用宿舎があります。また、学内には札幌市認可保育園「子どもの園」と事業所内保育所「ともに」の2カ所の保育施設があります（定員の空き状況により入所できない場合があります）。

困ったり悩んだりした時には

北海道大学の「学生相談総合センター」では修学、進学、就職などの進路相談に加え、家庭や友人関係などの個人的な問題も相談できます。ハラスメントに関することも相談員の先生が常時対応しています。文学院の建物内にも学生相談室があり、週2回相談を受け付けています。「保健センター」では、健康管理のための定期健康診断や健康診断書・健康診断証明書の作成、学生の健康相談および診療を行っています。

課外活動・ボランティア活動

学生の自主活動として文化系51、体育会系67、その他1の公認学生団体があり、分野を超えた交流の場となっています。例年6月の大学祭をはじめ、学内外での体育大会やスポーツイベントもあります。ボランティア活動に関心がある方は「学生ボランティア活動相談室」の活用をおすすめします。

研究に集中できる経済支援

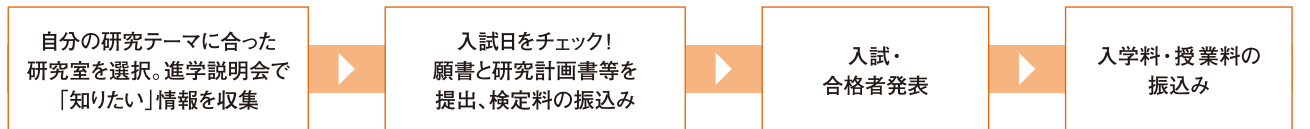
経済的理由により入学金、授業料の納付が困難な場合、入学金、授業料免除の制度を利用することができます。また、各種奨学金制度[※]や奨励金の機会もあり、研究に集中できるよう経済的に援助する各種支援制度も導入しています。他に大学院生を対象としたティーチング・アシスタント（TA）やティーチング・フェロー（TF）、リサーチ・アシスタント（RA）の制度があり、給与（謝金）を受けながら、教育や研究の補助的作業を通じて教育・研究のスキルを高めていくこともできます。

※参考:日本学生支援機構奨学金貸与月額(2020年度)

	修士課程	博士後期課程
第一種奨学金	50,000円または88,000円	80,000円または122,000円
第二種奨学金	50,000円、80,000円、100,000円、130,000円、150,000円のいずれか	

入試から入学まで

- 入試前に志望する研究室の教員や先輩にコンタクトを取り、研究テーマや方法、入試準備について十分な情報を集めておきましょう。札幌や東京、大阪などで行う進学説明会では研究環境の他にも研究計画書の書き方や学生生活など幅広い相談を受けています。
- 入学試験は、博士後期課程、修士課程ともに年2回（9月、2月／修士課程の社会人特別入試は2月のみ）実施しています。詳しい募集要項と過去の入試問題などは文学院のサイトに掲載しています。願書付きの募集要項の請求方法は、ウェブサイトのTOPページの「資料請求」をご覧ください。
- 文学院は、一般学生とは別に外国人留学生（修士課程のみ）や社会人の入試枠も設けています。社会人入学に配慮した長期履修制度もあり、入学後のそれぞれの研究スタイルを選ぶことができます。



2020年（令和2年）度入試カレンダー

	2020年						2021年	
	6月	7月	8月	9月	11月	12月	1月	2月
進学説明会	26日 オンラインで実施				14日 大阪 15日 東京	4日 札幌		
修士課程	一般・外国人留学生	22～30日 出願期間		5日 試験日 18日 合格発表			4～7日 出願期間	6日 試験日 18日 合格発表
	社会人	社会人特別入試の前期試験はありません					4～7日 出願期間	6日 試験日 18日 合格発表
後博士課程	一般・社会人	13日～17日 出願期間		6日 試験日 18日 合格発表			8～14日 出願期間	12日 試験日 18日 合格発表

※修士課程後期試験は、東京試験場でも実施されます。
大学院入試情報 北大大学院文学院ウェブサイトTOP→[入試情報]→大学院文学院入試情報

社会に扉を開く

[社会人入学(社会人特別入試)]

“社会に開かれた大学院”を目指して修士課程および博士後期課程の入試に「社会人入学(社会人特別入試)」を実施しています。詳細は、募集要項をご確認ください。

多忙な社会人に配慮した「長期履修制度」

主に時間的制約の多い社会人の修学に配慮したもので、申請条件を満たせば標準の修業年限より長い期間をかけて計画的な履修を認める制度です。詳細は、北大大学院文学院ウェブサイトTOP→[文学院]→[長期履修制度]

DATA

- ▶ 文学院「FAQよくある質問」→北大大学院文学院ウェブサイトTOP→[入試情報]→[よくある質問] 入試から生活まで幅広いFAQ集
- ▶ 北海道大学「学生生活」北海道大学ウェブサイトTOP→[学生生活] さまざまな学生生活情報を網羅→www.hokudai.ac.jp/gakusei/

DATA

- ▶ 検定料:30,000円 入学金:282,000円 授業料:535,800円 (入学金・授業料は改定されることがあります。募集要項で事前にご確認ください) 授業料は前期、後期に分けて払います。また、免除制度、奨学金制度などがあります。
- ▶ 入学状況 https://www.hokudai.ac.jp/introduction/20190704_gaiyou.pdf (33ページ)
- ▶ 卒業・修了者数(学位授与数) https://www.hokudai.ac.jp/introduction/20190704_gaiyou.pdf (34ページ)

MEMO

- ▶ 研究生 特定の専門事項について研究を希望し、一定の条件を満たしている方を「研究生」として受け入れています。単位を修得したり学位を取得することはできません。
- ▶ 聴講生・科目等履修生 授業科目の聴講または履修を希望し、一定の条件を満たしている方を「聴講生」、「科目等履修生」として受け入れています。科目等履修生は学期末試験等に合格した場合、教授会の承認を経て、所定の単位を得ることができますが、学位を取得することはできません。

免許・資格

文学院在籍中に中高教員免許状の他、学芸員の資格、専門社会調査士資格、1級考古調査士資格が取得できます。詳しくは入学時に配られる「学生便覧」を参照し教務担当に相談してください。

●教育職員免許状一覧

- (1) 中学校教諭一種免許状 [国語、社会、英語]
- (2) 高等学校教諭一種免許状 [国語、地理歴史、公民、英語]
- (3) 中学校教諭専修免許状 [国語、社会、英語]
- (4) 高等学校教諭専修免許状 [国語、地理歴史、公民、英語]

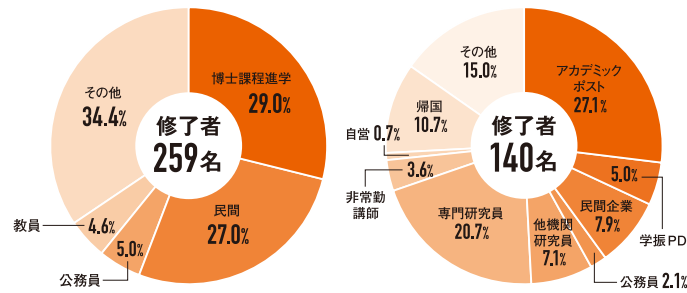
●学芸員 ●専門社会調査士 ●1級考古調査士

進路動向

〈修士課程〉過去3年間の進路

	修了者数	博士課程進学	就職	その他
平成29年度	85人	27人	29人	29人
平成30年度	72人	20人	28人	24人
令和元年度	102人	28人	38人	36人
過去3年間平均	—	29.0%	36.7%	34.4%

※その他の内訳：留学、帰国、文学研究院研究生など。



修士課程 過去3年間の進路

博士後期課程 過去5年間の進路

〈博士後期課程〉過去5年間の進路

※学振特別研究員や専門研究員を経て就職したケースも含む（修了後5年以内）。
※単位修得退学者の進路も含む。

●アカデミックポスト

金沢大学 人間社会学域 人文学類 講師、九州工業大学 教養教育院 講師、近畿大学 経済学部 経済学科 特任講師、高知工科大学 経済・マネジメント学群 助教、札幌学院大学 経営学部 専任講師、札幌国際大学 観光学部 専任講師、札幌大学女子短期大学部 准教授、大東文化大学 社会学部 社会学科 専任講師、日本大学 国際関係学部 助教、弘前大学 教育研究院 講師、広島大学 ダイバーシティ研究センター 助教、北星学園大学 文学部 専任講師、北海道大学 工学部 教授、北海道教育大学釧路校、北海道大学 大学文書館 特任助教、北海道大学 文学研究院 准教授、宮城学院女子大学 学芸学部 准教授、武蔵野大学 文学部 助教、室蘭工業大学 国際交流センター 特任助教、立命館大学 総合心理学部 助教
 〈中国〉華中師範大学 文学部 講師、江西財經大學 観光管理學部 専任講師、河北経貿大学外国語学院 専任講師、西安建築科技大学、西安交通大学 外国語学部 講師、東北師範大学 外国語学院 講師、中国伝媒大学、南京理工大学 准教授、南陽師範学院 専任講師、北京林業大学 専任講師、マカオ大学 人文科学学院 助教授
 〈台湾〉国立台北商業大学 助理教授
 〈タイ〉ナレースワン大学 人文学部 講師
 〈トルコ〉ボゾック大学
 〈北キプロス〉ファイナル・インターナショナル大学 講師
 〈バングラデシュ〉ジャンギルナガル大学

●学術振興会特別研究員(学振PD)

京都大学、国文学研究資料館、東京大学、北海道大学

●民間企業

駿台予備学校(講師)、北海道チャイナワーク(語学講師)、NTTコミュニケーション科学基礎研究所(リサーチアシリエイト)、北海道地域農業研究所(専任研究員)、日本入試センター(総合職)、佐勇(通訳)、商船三井キャリアサポート(貿易事務)、朝日新聞社、センタン(研究員)、FJコンボジット、河合塾(講師)

●公務員

帯広百年記念館(学芸員)、本郷新記念札幌彫刻美術館(学芸員)、北方民族博物館(学芸員)、北海道滝川高等学校

●他機関研究員

北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター、玉川大学脳科学研究所、国文学研究資料館、北海道大学 大学文書館、国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター、東京大学大学院 人文社会系研究科、北海道大学 環境健康科学研究教育センター、慶應義塾大学 文学部、北海道大学 科学技術コミュニケーション教育研究部門、復旦大学 哲学学院

●文学研究院専門研究員

●北海道大学キャリアセンター

学生とのコミュニケーションを大切にしながら就職活動をバックアップ。就職相談や就活指導、就職情報の配信ほか、公務員受験や教員採用試験も応援しています。

●上級人材育成ステーション

博士後期課程学生とポストドクター向けのキャリア形成支援組織。専門知識を活かしたキャリアパスを創出するための人材育成プログラムを実施しています。

修士課程修了生の就職先 過去3年間

官公庁	学術研究、専門・技術サービス業	情報通信業	製造業
茨城県庁 会計検査院 札幌市役所 北海道庁 北海道労働局 文部科学省 南砺市役所	アートフロントギャラリー エスネットワーク クロス・マーケティング 土別市立博物館 総合地球環境学研究所 ブレインパッド ヘル・クール研究所 北海道博物館	アイネット NTT DaTa MSE NTTドコモ 共同通信社 河北新報社 サイボウズ JBCCホールディングス 中国新聞社 データフォーシーズ トランスコスモス トライアルカンパニー 日光システムソリューションズ	賀茂川啓明電機 日本たばこ産業 パナソニック ヨシムラ
教育・学習支援業	サービス業	卸売業・小売業	医療・福祉
釧路市立北陽高等学校 行知学園 札幌第一高等学校 さっぽろ青少年女性活動協会 札幌北星学園 進学会 東京都立中央中学校・高校 ファミリー 北嶺中・高等学校 北海道共和高等学校 北海道内中・高等学校 北海高等学校 宮城県立高等学校	エイムネクスト 絵夢アニメーション オリエンタルランド 栗林商会 コンベンションリンケージ シンク ゼネラルサービス ZEBEE 総合商研 ファーストコネク マーキュリー MAPPA	日本電気 日本アイビーエム・ソリューション・サービス 日本放送協会 NetEase Interactive Entertainment 日立社会情報サービス 北海道新聞社 メンバーズ ユーザックシステム リンクレア	イオンリテール 双日 ニトリ ビックカメラ ヨドバシカメラ
		運輸業・郵便業	建設業
		東日本高速道路 ヤマト運輸	立川工務店

博士後期課程 修了者の声

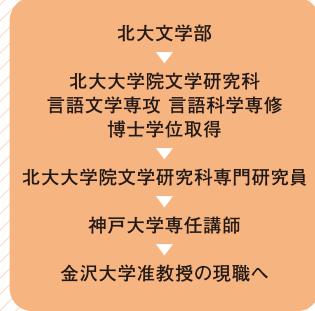
Voices of graduates

多様な言語研究者が集う北大で得た知見が
研究者としての糧に

金沢大学 人間社会研究域 歴史言語文化学系
准教授 西出 佳代 さん [2013年度修了]

第二外国語でフランス語を、第三外国語でドイツ語を履修した私は、もともとのフランス史やドイツ文学への興味から、両言語の接触地域の言語状況やそこで話される言語へと徐々に関心を移していきました。卒業論文でルクセンブルクとルクセンブルク語を扱おうと決めたとき、その研究領域の豊かな可能性に魅了され研究者の道を志しました。理論言語学から記述言語学まで、大言語から少数言語まで様々な専門の研究者が集まる北海道大学という環境は、私に多くの視座を与えてくれました。また、クラーク記念財団や組織的な若手研究者等海外派遣プログラムなどの助成を得て研究に励めたことは、大きな糧となっています。平成28年度には、社会的に高く評価される研究業績を上げ文学研究科の名誉を高めたとして、文学部同窓会より「楡文賞」をいただきました。

北海道大学で得られた広い知見をいかし、現職ではドイツ語学の授業を担当しながらルクセンブルク語の研究を進めています。大学院修了はゴールではありません。常にその先を見据えながら、自分の居場所を確認しつつ前へ進むことが重要ではないかと思えます。



修士課程 修了者の声

Voices of graduates

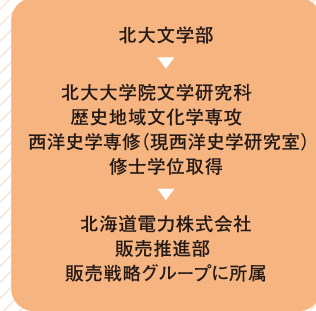
調べ、読み解き、論理的に表現する経験が
販売戦略立案の土台に

北海道電力株式会社 販売推進部 販売戦略グループ
前田 悠太 さん [2013年度修了]

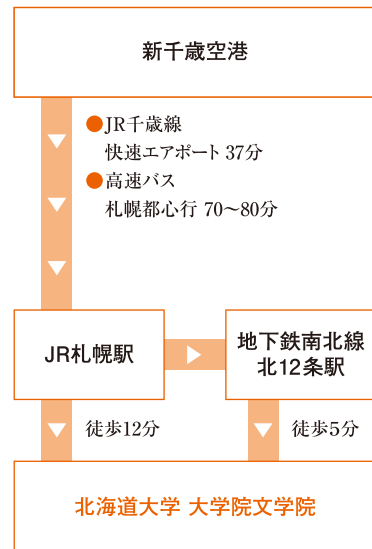
映画「グラディエーター」等を通じて古代ローマ史に関心を持ち、西洋史学研究室を選択しました。学部時代に「古代ローマの奴隸制」研究に必要な英語や古代ラテン語等の語学力を高め、大学院時代の2年間では研究内容を深めました。

大学院で得た学びは、研究の中で計画的にPDCAサイクルを回して、課題を見抜き、その解決に向けたプロセスを反復することで身に付く論理的な思考力と実践力です。現在はお客さまのご要望にお応えする販売戦略の立案や中長期の販売目標の設定・管理等の業務を担当しており、大学院で培われたこれらの力が大いに役立っています。さらに、インプット力とアウトプット力も鍛えられました。経年劣化により欠損が多い古代ラテン語史料を前後の文脈等から類推し読み解いた経験や、修士論文をロジカルに組み立てた経験が、社内外に向けて資料を作成し、説明を行う場面等で活かされています。

皆さんも研究職と民間企業就職のいずれを選択するかを問わず、人生を送るうえで譲れないポイント・大事にしたいポイントを常に意識し、実りの多い学生生活を過ごしてください。



Access



文学院周辺地図



国立大学法人
北海道大学 大学院文学院

〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目

連絡先 文学事務部教務担当
電話 011-706-3005 / 011-706-3004 (直通)
URL <https://www.let.hokudai.ac.jp/>

Graduate School of Humanities and Human Sciences,
Hokkaido University
Kita 10, Nishi 7, Kita-ku, Sapporo, 060-0810 Japan

- 制作・発行 北海道大学 大学院文学研究院
- 編集担当 林寺正俊、村田勝幸、佐藤知己、笹岡正俊 (広報誌専門部会委員)
森岡和子、山下朋美 (研究推進室)

- 企画・編集 株式会社スペースタイム
- デザイン 株式会社デクスチャー

■本誌に掲載されている情報は2020年6月現在のものです。
■本誌の無断複写(コピー)・転載は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

